

博士論文

中国青海省黄南藏族自治州尖扎県における
多民族村の言語使用状況に関する研究

周楊措

広島大学大学院国際協力研究科

2019年9月

中国青海省黄南藏族自治州尖扎県における
多民族村の言語使用状況に関する研究

D150695

周楊措

広島大学大学院国際協力研究科博士論文

2019年9月

広島大学大学院国際協力研究科

論 文名: 中国青海省黄南藏族自治州尖扎県における多民族村の言語使用状況に関する研究

学位の名称: 博士 (学術)

学生番号: D150695

氏 名: 周楊措

令和元年 7月24日

審査委員会

委員長・教授

佐藤 暢治



教授

関 恒樹



准教授

深見 兼孝



広島大学大学院文学研究科教授

根本 裕史



東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授

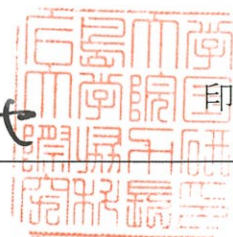
星 泉



2019年 8月 00日

研究科長

馬島 真七



目 次

第1章 序論	1
1.1 研究の背景と研究の目的	2
1.2 先行研究	6
1.2.1 言語選択と言語使用に関する先行研究	6
1.2.2 チベット族の言語使用状況に関する先行研究	7
1.3 本研究の位置付け	10
1.4 研究方法	10
1.5 本論文の構成	11
第2章 青海省及び調査地の概要	13
2.1 青海省の概要	14
2.1.1 青海省の地理的及び歴史的な位置付け	14
2.1.2 青海省の行政区分及び各民族の分布	15
2.2 尖扎県の概要	18
2.2.1 尖扎県の地理的及び歴史的な位置付け	18
2.2.2 尖扎県に暮らす各民族とその由来	22
2.3 康楊鎮の概要	23
2.4 カルマタン村の概要	26
2.5 カルマタン村で使われている各言語	28
2.5.1 チベット語アムド方言	28
2.5.2 漢語青海方言	32
第3章 漢族家庭の言語使用状況	36
3.1 漢族の移住過程	37
3.2 漢族家庭の言語使用	38
3.3 漢族家庭の特徴	40
3.4 王徳有家の事例	46
3.4.1 王徳有家の基本データ	46

3.4.2 王徳有家の三世代の言語使用	51
3.4.3 考察	55
3.5 まとめ	57
第4章 チベット族家庭の言語使用状況	58
4.1 チベット族の移住過程	59
4.2 チベット族家庭の言語使用	60
4.3 チベット族家庭の特徴	63
4.4 ツィラン家の事例	64
4.4.1 ツィラン家の基本データ	64
4.4.2 ツィラン家の三世代の言語使用	66
4.4.3 考察	70
4.5 まとめ	73
第5章 回族家庭の言語使用状況	74
5.1 回族の移住過程	75
5.2 回族家庭の言語使用	77
5.3 回族家庭の特徴	77
5.4 王敬民家の事例	79
5.4.1 王敬民家の基本データ	79
5.4.2 王敬民家の三世代の言語使用	82
5.4.3 考察	86
5.5 まとめ	88
第6章 結論	90
6.1 三つの家庭の比較	91
6.2 家庭内の言語を決定する要因	92
6.3 今後の課題	101
参考文献	103
謝 辞	112

地図 1：中国の地図	4
地図 2：青海省の行政区分	5
地図 3：黄南蔵族自治州尖扎県（筆者作成）	18
地図 4：黄南蔵族自治州	19
地図 5：康楊鎮の地図	24
表 1：青海省海南蔵族自治州倒淌河鎮 A・B 村に居住するチベット族の言語使用	7
表 2：青海省黄南蔵族自治州尖扎県都市部に居住するチベット族の言語使用	8
表 3：青海省黄南蔵族自治州尖扎県農村部に居住するチベット族の言語使用	9
表 4：青海省の行政区分	16
表 5：尖扎県に属する各村の状況	19
表 6：建国以降における康楊鎮の名称の推移	24
表 7：康楊鎮に属する村とその民族構成	25
表 8：カルマタン村の構造	27
表 9：チベット語アムド方言の区分	29
表 10：カルマタン村の漢族における家庭内の言語使用	39
表 11：漢族の同化程度	42
表 12：カルマタン村の漢族家庭の各世代の言語使用	45
表 13：王徳有家の基本データ	47
表 14：王徳有家の第一世代の言語使用	52
表 15：王徳有家の第二世代の言語使用	53
表 16：王徳有家の第三世代の言語使用	54
表 17：王徳有家の三世代の言語能力	55
表 18：王徳有家の各世代の言語使用の優先度	56
表 19：カルマタン村のチベット族の家庭内の言語使用	62
表 20：ツィラン家の基本データ	64
表 21：ツィラン家の第一世代の言語使用	67
表 22：ツィラン家の第二世代の言語使用	68

表 23 : ツィラン家の第三世代の言語使用	70
表 24 : ツィラン家の三世代の言語能力	71
表 25 : ツィラン家の各世代の言語使用の優先度	72
表 26 : 東門村の構造	75
表 27 : 王敬民家の基本データ	80
表 28 : 王敬民家の第一世代の言語使用	83
表 29 : 王敬民家の第二世代の言語使用	84
表 30 : 王敬民家の第三世代の言語使用	85
表 31 : 王敬民家の三世代の言語能力	86
表 32 : 王敬民家の各世代の言語使用の優先度	87
表 33 : 三つの家庭の共通点	91
表 34 : 三つの家庭の相違点	92
表 35 : 各家庭内の言語使用に影響する要因	93
表 36 : 裕固族自治县における家庭内の言語と次世代の言語を決める傾向	99
写真 1 : チベット語の文章	48
写真 2 : 漢語の文章	48
写真 3 : 漢語の新聞	49

第1章 序論

1.1 研究の背景と研究の目的

中華人民共和国は漢族と55の少数民族から構成され、それぞれ民族の人口や歴史的な背景は様々である。10億人を超える漢族もいれば、僅か3,682人のローバ族（2010年度）もいる。ウイグル族やチベット族やモンゴル族のように名前がよく知られている民族もいれば、ホジェン族やタタール族のようなあまり名前が知られていない民族もいる。

古代から漢民族は周辺の民族と接触があり、時には敵対関係、時には融和的な関係、時には直接の統治を行ってきた。漢族をマジョリティーとし、他の民族との協和的な関係が見られようになったのは中華民国の時期からである。中国におけるこのような少数民族の民族構成は中華民国の成立と同時に唱えられた五族協和¹を基礎にし、1949年の建国以来大規模な民族を識別する活動を行ってきたことにある。民族識別について毛里（1998:61）は、第一段階は建国から1954年まで、第二段階は1954年から1965年まで、第三段階は1978年以降という三段階からなるプロセスを指摘している。当初は9民族、その後は38民族、54民族、そして1982年以後は55民族が識別され、現在中国で公認されている少数民族はその55である。1957年以降の中国の公式見解に従うと、少数民族の居住は、長い歴史的なプロセスを経て諸民族が雑居しており、「大分散・小集住」の状況にあることになる。しかし、実際にはチベット族、ウイグル族、モンゴル族などは集中居住地域を持っている。

2015年の人口調査に従うと、中国の総人口は13億7,349万人である。そのうち漢族は12億5,614万人を数え、総人口の91.46%を占めている。一方、少数民族は1億1,735万人であり、総人口の8.54%を占めているに過ぎない²。その少数民族の言語・文字使用状況に関して瞿（2014:14）は、「第四回の調査は国務院が批准し、……1999年正式に中国言語文字使用調査を開始した。その中には少数民族の言語と文字も含まれる。……民族言語は65言語、前回の調査では民族文字は24であったが、今回は34に達した」と述べている。

近年、少数民族が暮らす地域は経済の開発や義務教育の普及により、漢語への要求が高

¹ 五族は辛亥革命期以降に孫文らが提唱したものであり、漢族、満州族、モンゴル族、回族、チベット族に該当する。

² 中華人民共和国国家統計局「2015年全国1%人口抽様調査主要データ公報」による。

くなる一方であり、少数民族の言語は私的な場など使う場所が限られつつある。この民族言語の問題に関して、言語教育や言語政策の面からこれまで多くの研究成果が発表されている。しかしながら、いずれの研究も、民族語の使用頻度が低くなる主な要因は学校教育による漢語普通話の普及であると指摘しているに過ぎない。学校教育や市場経済の浸透が民族語衰退の大きな要因となっていることは言うまでもないが、今日でもなお複数の言語が日常的に使用されている多民族村で、民族語と漢語がどのように使い分けられているのかは、根本的な問題として注目すべき課題であると思われる。

本論文では、以上のような観点から、中国の青海省黄南藏族自治州尖扎県のカルマタン村 (*Ch.*³ 尕麻塘、*Tib.*⁴ ཀར་མ་ཐང་། *skar ma thang*) を事例として取り上げ、村人が如何に各言語を使用しているのかを考察し、多民族村の言語使用状況とその変化を明らかにすることを目的にする。カルマタン村は多民族の村として、チベット族が圧倒的に多いが、他にも少数の漢族と回族が居住し、言語的にもチベット語アムド方言のほか、漢語青海方言も使われ、村人が普通にチベット語アムド方言と漢語青海方言を併用している村である。そのため、多民族村の言語使用状況とその変化を明らかにするには格好の村と言える。

本論文では、まず「漢族のまま」残っているカルマタン村の王徳有の家庭を事例として取り上げ、世代ごとに漢語とチベット語を如何に使い分けているのか。そして、なぜ世代ごとに言語使用が微妙に移り変わっているのか、その理由を明らかにする。

次に、婿(婿養子)が漢族であるカルマタン村のツィランの家庭を事例として取り上げ、世代ごとに漢語とチベット語を如何に使い分けているのか。また、漢族の婿が家庭内における言語使用に影響を与えているのかどうかを明らかにする。

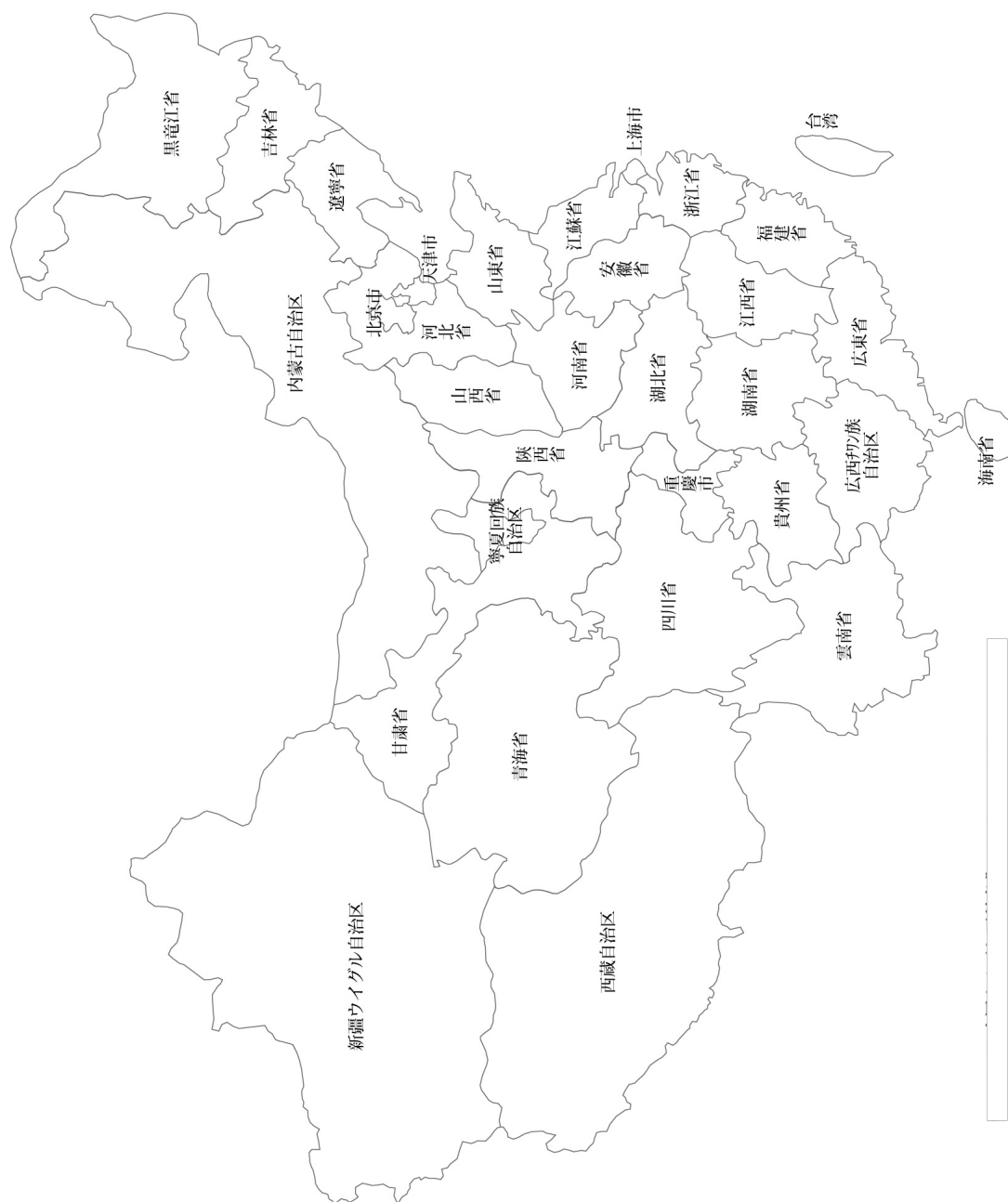
さらに、かつてカルマタン村の所有地であったグワタン村 (*Ch.* 各巴灘、*Tib.* ཀོ་བ་ཐང་། *ko'u ba thang*) に居住している回族の王敬民の家庭を事例として取り上げ、チベット族と「雑居」している回族家庭の言語使用状況を明らかにする。

本論文で事例として取り上げる各家庭は、カルマタン村またはグワタン村の一般的な家庭ではあるが、これらの各家庭の言語使用が、村全体の言語使用の現状を示すものではない。カルマタン村を調査地として選んだ理由は上に述べたように多民族の村として、多言語が話されていることにある。そして、カルマタン村は筆者の生まれ育ったところであり、

³ *Ch* は Chinese の略語である。

⁴ *Tib* は Tibetan の略語である。

調査地の事情が分かっているため、調査が行いやすいというのもこの地を調査地として選んだ理由の一つである。



地図1：中国の地図

出典： http://www.allchinainfo.com/profile/city/china_whitemap.html (2018.10)



地図 2：青海省の行政区分

出典：http://www.onegreen.net/maps/Upload_maps/201304/2013041700035420.jpg (2018.10)

1.2 先行研究

先行研究として、1.2.1 節では言語選択と言語使用に関する先行研究を述べ、1.2.2 節ではチベット族の言語使用状況に関する先行研究について述べる。

1.2.1 言語選択と言語使用に関する先行研究

山本（2014）は言語選択・使用に影響を及ぼす要因について、家族に関わる要因群と社会に関わる要因群の二つを取り上げている。以下に、山本（2014：87-92）の内容を整理しておく。

(1) 家族に関わる要因群

① 人に関わる要因：家族メンバーの基本的な事情、要するに当該の家族が核家族か拡大家族か、同居しているのは誰か、子供の数は1人か複数か、子供の年齢はいくつか、就学しているか就学前か。家族のメンバーの言語能力、A親、B親それぞれが、互いの言語のB言語、A言語も理解する能力を備えていれば、家族の間で使用する言語を比較的自由に選択でき、使用しうる。

② 生活環境に関わる要因：心理的な側面に関連する「各自が持つ言語や文化に対する意識」、家族個々人が、特定の言語やその背景のある文化、また言語の話者集団に対して感じる親疏の度合い、つまり心理的な距離感あるいは自己同一感の濃淡、すなわち自分もその集団の一員であると強く感じるか否かなども、言語選択や使用に大きな影響を及ぼす。「子供の生活空間の言語環境」、これは、一言で言えば、子どもが1日の大半をどのような言語環境の下で過ごすかどうかということである。

(2) 社会に関わる要因群

言語威信性：威信性の高い言語を母語にする。母語でなくてもこれを流暢に使用できることは、その通用性、利便性もさることながら、その社会で高いステータスを得るための基本的要件とも見なされうる。

1.2.2 チベット族の言語使用状況に関する先行研究

チベット地域に暮らしている漢族と回族に関する先行研究として、漢族に関するものには、漢族とチベット族の族際結婚について研究した王（2008）、徐・関（2009）、馬（2012）がある。他方、回族に関するものとしては、駱（2005）がある。駱（2005）は回族が商人の身分でチベット地域に移住した過程を述べている。そのほかにも、チベット語を母語としている化隆県の「蔵回」を論じた宗喀・濛正岡布（2015）と冶（1986）の研究がある。しかし、これらはいずれも民族の移住過程や民族間の族際結婚、民族の自己意識に関する研究であり、チベット地域に暮らしている漢族と回族の言語使用に関する先行研究は見当たらない。そのため、以下では主にチベット族の言語使用を中心に先行研究をまとめておく。

チベット族における日常の言語使用状況を論じたものとして、曹（2014）がある。曹（2014：72-78）は青海省海南蔵族自治州倒淌河鎮に属するA・B村⁵の村人41人を調査対象（16歳以上）とし、村人が日常においてチベット語と漢語をどのように使い分けているのかを調べている。その調査結果をまとめたものが表1である。

表1：青海省海南蔵族自治州倒淌河鎮A・B村に居住するチベット族の言語使用

①村内における言語使用			
話しかける対象	チベット語	漢語	二言語併用
同民族の隣人	36人	0人	5人
異民族の隣人	33人	2人	6人
知らない人	35人	2人	4人
②村外における言語使用			
言語使用の場	チベット語	漢語	二言語併用
市場	34人	0人	7人
政府機関	21人	0人	20人
病院	28人	1人	12人

出典：曹（2014：74）を基に筆者が作成

⁵ 原文では「甲・乙村」と書いてあるが、ここでは「A・B村」と表す。

そして、曹（2014：76）は当地の教育の発展によって、漢語の読み書き能力は30年前の2.4%から現在36.6%に増加しているが、当地の威信言語は今でもチベット語であり、漢語は補充的な役割を持つに過ぎないと指摘している。

姚（2014）もまた曹（2014）とほぼ同様の調査を、青海省黄南蔵族自治州尖扎県の商店街で29人（16歳以上の尖扎县政府所在地、またはその周辺に居住しているチベット族）のチベット族を対象に行っている。表2は、その調査結果をまとめたものである。

表2：青海省黄南蔵族自治州尖扎県都市部に居住するチベット族の言語使用

①家庭内における言語使用			
話しかける対象	チベット語	漢語	二言語併用
両親	29人	0人	0人
配偶者・兄弟	25人	0人	4人
子ども ⁶	20人	0人	2人
②家庭外における言語使用			
言語使用の場	チベット語	漢語	二言語併用
市場	7人	3人	17人
政府機関	8人	6人	15人
病院	6人	6人	17人

出典：姚（2014：184-185）を基に筆者が作成

姚（2014）の調査結果から、町またはその周辺に居住しているチベット族は家庭内ではチベット語をよく使い、若い世代ではチベット語と漢語の二言語併用になっていることが分かる。曹（2014）は家庭内での言語使用について詳細に記述していないため、姚（2014）と単純に比較することはできないが、家庭外での言語使用は姚（2014）の方が二言語併用または漢語の使用度が高くなっている。

⁶ 姚（2014：184）に、「調査対象のなかには子どもがいない者、あるいは子どもがまだ話せないという者がいる。そのため、ここだけが調査人数と一致していない」とある。

姚（2015）は尖扎県の農村部でも同様の調査を行なっている。姚（2015）はチベット村である古什当村（དགུ་ཤྲོང་། dgu steng）を調査地として、16歳から66歳の33世帯（各世帯1人）に対し、アンケート調査を行なった。そのアンケート調査は主に言語習得、言語理解、言語学習の過程、言語使用、言語・文字の態度に関わるものであり、質問が41からなる対面調査である。表3に言語使用の調査結果を示しておく。

表3：青海省黄南藏族自治州尖扎県農村部に居住するチベット族の言語使用

①家庭内における言語使用			
話しかける対象	チベット語	漢語	二言語併用
両親	30人	0人	3人
同世代	28人	0人	5人
目下	31人	0人	2人
②家庭外における言語使用 ⁷			
言語使用の場	チベット語	漢語	二言語併用
市場	21人	0人	12人
政府機関	15人	2人	9人
病院	18人	3人	9人

出典：姚（2015：86-87）を基に筆者が作成

姚（2015）の調査結果を見ると、チベット族の家庭で使われる主な言語はチベット語であることが分かる。一方、家庭外ではチベット語と漢語の二言語を併用する人が多く、漢語だけを使用する人もいる。しかし、姚（2014）のように町または町の周辺に居住しているチベット族ほど二言語併用の状況にはない。

チベット族の言語能力について論じた安（1993）を取りあげておく。安（1993：106-108）は青海省・甘粛省のチベット族を事例として取り上げ、調査地のチベット地域を農耕地帯（青海省の同仁県、甘粛省の天祝と夏河）と牧畜地帯（青海省の果洛州と共和県、甘粛省

⁷ 姚（2015）は、政府機関や病院での言語使用を回答した人数が調査対象の総人数と一致していない。

この点について姚（2015：87）は、「調査対象者によっては政府機関と病院に行ったことがないというため、調査対象人数と一致していない」と述べている。

の甘南州)に分けて記述している。サンプル調査方法を用い、調査地のチベット族が二言語(チベット語と漢語)を理解できるかどうかを調べ、その理解能力を「懂(理解できる)・不懂(理解できない)」の二つに分けて調査が行なわれている。調査結果として、牧畜地帯は回答者138人のうち10人しか漢語が理解できないが、他方、農耕地帯は回答者232人のうち漢語を理解できる人の数として168人が示されている。差異の要因として、安(1993)は、農耕地帯は牧畜地帯に比べ人口集中度が高く、漢族が居住する町により近いことを挙げている。

1.3 本研究の位置付け

上述した山本(2014)は、異言語家族での言語選択と言語使用の要因を、家庭内の要因と社会要因に分けて記述しているが、本研究では、山本(2014)の言語選択と言語使用に関わる各要因を参照にし、チベット村の各家庭の民族構成や各世代の言語使用を詳細に記述する。

多民族村に居住しているチベット族の言語使用状況に関する先行研究は、いずれも短期間による質問紙のアンケート調査が多く、調査対象者個々の民族所属の背景、言語選択、言語使用の背景までは詳細に記述されていない。本研究では、長期間調査地に住み込んで、村全体の民族構成及び言語使用を把握し、それから調査対象の各家庭の民族構成、その家庭の各世代の言語能力、家庭内及び家庭外までの言語使用を記述する。

1.4 研究方法

本研究の調査方法は、質問紙によるアンケート調査のほか、インタビュー、参与観察、録音によるデータ収集、ビデオ通話などである。本研究で使われている個人名は、本人から承諾を得たものである。

調査期間は、2016年の8月と9月の2ヶ月、2017年の8月、2018年の3月、2018年の9月9日から9月26日、2019年の2月15日から3月3日である。

本研究で用いる資料は全てフィールド調査で得たものである。資料収集は康楊鎮政府と村人が提供した情報、アンケート調査、調査対象の家庭訪問といった3段階の過程を経ている。

第一段階は、康楊鎮政府と村人から得た資料である。康楊鎮政府から提供された資料には政府に登録している村の世帯数と人数、民族所属などの基本的なデータが含まれる。詳

細さに欠ける点については、鎮政府の職員にインタビューをし、内容を補充している。村人から提供された情報には、村長、書記、隊長、長老、アホン（イスラム教指導者）など村で名望のある人により提供された情報もあれば、偶然出会った村人から提供された情報もある。これらには村の歴史、村内部の構成、各民族の移住過程、民族間の接触、言語能力や日常における言語使用などが含まれている。

第二段階は、村全体に実施した質問紙によるアンケート調査である。このアンケート調査は主に家庭内での言語使用に関する質問であり、設問は全部で10問である。調査対象者の中にはチベット語または漢語しかできない村人もいるため、アンケート用紙はチベット語版と漢語版の二つを用意した（論文末の添付資料を参照）。このアンケート調査は、カルマタン村で二回行った。一回目は村全体に質問紙を配り、二日後に質問紙を回収した。しかし、文字の読み書きができない村人もいたため、無回答の質問紙が多数あった。そこで二回目は、一軒一軒家を訪問して質問紙によるアンケート調査を行なった。筆者が調査対象の回答を記入し、価値のある情報はメモを取った。グワタン村では、このアンケート調査は一回しか行っていない。

第三段階は、村長・村人が紹介してくれた家庭、または対面調査の時に発見した特徴のある家庭を再度訪問し、その家庭の各世代が家庭内及び家庭外でどの言語を使用しているのか、聞き取り調査を行なった。家庭によって、出稼ぎ中の家族もいたので、その時にはWeChat（微信）を用い、ビデオ通話で調査を行なった。

1.5 本論文の構成

本論文は第1章の序論を含め、6章で構成されている。

第1章は序論であり、研究の目的と先行研究、研究方法について述べている。

第2章では、青海省の地理的及び歴史的背景を歴史的な背景に注目しながら青海省に居住している各民族の人口とその分布、尖扎県の概要及び康楊鎮の概要について述べている。そして、さらにカルマタン村の概要を述べ、当地で使われている各言語について紹介している。

第3章では、「漢族のまま」残っている王徳有の家庭を事例として取り上げ、世代ごとに漢語とチベット語をどのように使い分けているのかを明らかにしている

第4章では、婿が漢族であるチベット族のツィランの家庭を事例として取り上げ、漢族の婿が家庭内における言語使用に影響を与えているのかどうかを明らかにしている。

第5章では、かつてカルマタン村の所有地であったグワタンに居住している王敬民の家庭を事例として取り上げ、チベット族と「雑居」している回族家庭の言語使用を明らかにしている

第6章では、本研究においてこれまで論じてきた三つの家庭を比較するとともに、それらの共通点と相違点を記述し、三つの家庭内の使用言語を決定する要因をまとめる。その上で、多民族・多言語家庭の言語使用について、嫁ぎ先の言語と周囲の言語が家庭内の言語を決定する重要な要因であることを論じた王（1998）を取り上げ、本研究の事例と比較考察を試みる。最後に、今後の研究課題について述べる。

第2章 青海省及び調査地の概要

本章では、青海省の地理的及び歴史的背景に注目しながら青海省、尖扎県、康楊鎮及び調査地であるカルマタン村の概要について述べる。

2.1 節では、青海省の概要を述べる。2.2 節では、尖扎県の概要を述べる。2.3 節では、康楊鎮の概要を述べる。2.4 節では、本論文の調査地であるカルマタン村の概要を述べる。そして、2.5 節では、カルマタン村で使われている各言語を紹介する。

2.1 青海省の概要

2.1.1 青海省の地理的及び歴史的な位置付け

青海省は、中華人民共和国の西部の青蔵高原東北部に位置する一つの省である（地図 1 を参照）。青海省は黄河、長江、メコン河の水源地帯であり、別称は「三江源」である。青海省東北部には中国最大の内陸塩湖、青海湖がある。この青海湖が青海省の名前の由来となっている。この省に隣接する省としては、北から東にかけて甘肅省、南東に四川省、南西に西蔵自治区、北西に新疆ウイグル自治区がある。チベット族自身の区分に従うと、チベット族が居住している地域は大きくウーツァン、カム、アムドの三つの地域に分けられ、玉樹蔵族自治州以外の青海省はアムド地域に属する。

現在の青海省一帯は、辛亥革命後の 1912 年以降、中国北洋軍閥政府に西寧総兵として任命された馬氏一族によって、ほぼ 42 年間統治されていた。そして 1928 年になると、南京国民政府により甘肅省に属していた現在の青海地区は甘肅省から分離され青海省へと編入された。このような青海省の 1949 年の改革以前の歴史について、先巴（2014）と陳（2015）に従い、整理すると以下のようなようになる。

1928 年 9 月 5 日国民党中央政治会議第 153 回において青海省の建省を決議した。同年 10 月 17 日、国民党中央政治会議第 159 回において、元甘肅西寧都に所属していた西寧、大通、楽都、循化、巴燕、湟源、貴徳の七県を青海省に編入させ、西寧を省都に定めた。

1930 年 1 月、西寧で討蔣大会を行い、同年 10 月馮玉祥が敗戦し、蒋介石政権は馬麟の青海統治を承認した。

1931 年 1 月 6 日、国民党政府は馬麒を青海省政府の代理主席に就任させたが、同年 8 月馬麒は病死し、馬歩芳が青海省政府の代理主席となった。

2.1.2 青海省の行政区分及び各民族の分布

青海省の面積は 72 万平方キロメートル、中国では 4 番目の大きな省であり、日本の 2 倍ほどの面積を持っている。青海省は「六つの自治州」と「一つの地区」、「一つの市」から構成されている（表 4 と地図 2 を参照）。

中国が 2010 年に実施した第六回人口調査によると、青海省の総人口は 5,626,722 人である。そのうち漢族は 2,983,516 人であり、総人口の 53.02%を占める。一方、少数民族の総人口は 2,643,206 人であり、総人口の 46.98%を占める。2000 年に実施された第五回人口調査と比較すると、漢族の人口は 5.67%、少数民族の人口は 12.08%増加しており、少数民族の人口が増長する速度の方が漢族より明らかに高い。

青海省に居住する民族は 34 前後であると言われ、そのなかで人数が 1 万を越えるのは漢族とチベット族、回族、サラール（撒拉）族、トゥ（土）族、モンゴル族の六つである。表 4 は青海省の行政区分である。

表4：青海省の行政区分

	海拔 (メートル)	面積 (平方キロメートル)	人口 (万)	行政
西寧市	2,295	7,665	22,087	城中区、城東区、城西区、城北区湟 源県、湟中県、大通回族土族自治県
海東地区	2,125	1,280	13,968	平安県、楽都県、民和回族土族自治 県、互助土族自治県、化隆族自治 県、循化撒拉族自治県
海北藏族自治州	3,080	45,000	2,733	海晏県、祁連県、剛察県、門源回族 自治県
黄南藏族自治州	2,491	18,800	2,567	同仁県、尖扎県、沢庫県、河南蒙古 族自治県
海南藏族自治州	2,835	46,000	4,417	共和県、同徳県、貴徳県、興海県、 貴南県
果洛藏族自治州	3,719	76,000	1,816	瑪沁県、班瑪県、甘徳県、達日県、 久治県、瑪多県
玉樹藏族自治州	3,681	267,000	3,784	玉樹県、雜多県、称多県、治多県、 囊謙県、曲麻萊県
海西蒙古族藏族 自治州	2,982	325,800	4,893	徳令哈市、格爾木市、茫崖市、烏 蘭県、都蘭県、天峻県、大柴旦行 政委員会

出典：「<http://ja.wikipedia.org/wiki/Catrgory>」を基に筆者が作成（2012.12）

青海省の各民族の歴史的な背景を簡単にまとめておく。

チベット族の居住地域は青海省全土の90%以上に及んでいる。チベット族の生業は主として家畜の多頭飼育をともなった穀物農業であり、牧畜民は少数である。歴史上、チベット族が青海省に現れたのは、吐蕃時代（7世紀）のことである。青海省の玉樹藏族自治

州を除く全チベット自治州においてチベット語アムド方言が使われている。

チベット族の次に居住地域が広いのは回族である。中野（2009：53）は「回族は青海の東部・黄河・大通・湟水等の流域に散布し、普通漢族と雑居する。大部分は農業に従事するが都市にある者は商業を営む」と述べている。回族の主な使用言語は漢語青海方言であるが、厳密には固有の言語も文字も持っていないといえる。

サラール族は習慣的に回族と近く、青海省循化県に居住している。彼らも農業のほか商業も営む。田畑他（2001：100）は「この民族の歴史に関する伝承によれば、中央アジアの現ウズベキスタン共和国のサマルカンドから、現在多数が居住している循化サラール族自治県に遷移してきたといわれる」と述べている。サラール族はイスラム教を信仰し、固有の言語は持っているが、文字は持っていない。被っている帽子も回族とは異なり、白以外にも紫、赤、黒などを被っている。サラール族の民族語はチュルク系のサラール語である。

モンゴル族は主に海西蒙古族蔵族自治州、海北蔵族自治州、黄南蔵族自治州河南蒙古族自治県の三地域に居住している。シンジルト（2003：81）は「この三地域はともに言語、服装、生活習慣などの面でチベット族の影響を受けている。ただし、海西州や海北州、とりわけ海西州のモンゴル地帯が地理的に他のモンゴル地域（新疆、甘粛省）と隣接しあるいは相互交流も完全に遮断されなかったため、モンゴル語やモンゴル文字を現在でも保持しており、青海省モンゴル社会においても、注目されやすい「中心」的な存在となってきた」と述べている。

トゥ族は青海省の互助、民和、大通、同仁を中心に居住している。トゥ族の形成について、田畑他（2001：81）は「元王朝末期から清王朝初期にかけて、徐々にトゥー族を形成したのである」と記述している。トゥ族は「蒙古爾」、「察罕蒙古爾」と自称し、彼らの民族語である土族語もモンゴル語と似ているため、トゥ族はモンゴルの後裔であるという説が一般に知られている。

人口が圧倒的に多いのは漢族である。漢族は主に西寧市及びその周辺に集中して居住し、農村部の漢族は主に農業に従事し、町に居住している漢族は公務員、教員、警察、医者、商売者などの仕事に務め、各仕事場でも多数の人数を占めている。漢族は漢語青海方言を母語として使っている。

2.2 尖扎県の概要

2.2.1 尖扎県の地理的及び歴史的な位置付け

尖扎県は1953年6月2日に成立し、同年12月に黄南藏族自治州の帰属となった（地図3と4を参照）。県政府所在地はマクタン（*Ch.*馬克唐、*Tib.* མར་ཁུ་ཐང་། Mar khu thang）である。青海省政府所在地の西寧から127キロメートル、青海省の東南部に位置し、黄南藏族自治州の北部と、東北部は黄河に接している。

尖扎県は、面積が1,712平方キロメートル、人口が約5万人の県である。チベット族は総人口の67%を占めている。黄南藏族自治州において、海拔が一番低く、最低海拔は1,960メートル、最高海拔は4,614メートルであり、牧畜より農業に従事する人が多い。坎布拉国家森林公园と80年代からのダム建設による人工湖などの観光地も開発され、黄南藏族自治州のなかでは経済的に著しく発展している地域である。



地図3：黄南藏族自治州尖扎県



地図4：黄南蔵族自治州

出典：チョルテンジャブ（2014：105）

表5から分かるように、尖札県の主な民族はチベット族であるが、他に回族、漢族もいる。

表5：尖札県に属する各村の状況

	村の数（村）	世帯数（戸）	人口（人）
全県	135	3,822	18,177
チベット族	128	2,993	14,440
回族	6	702	3,155
漢族	1	112	500
他の民族	0	15	82

出典：Dbang grags（2011：846）を基に筆者が作成

尖札県の地名の由来については、いくつかの解釈がある。Hor gtsang 'jigs med（2009：

215) では二つの解釈が挙げられている。その一つは、チェン (གཅན། gcan) とツァ (ཚ། tsha) という名字を持っていた部族が居住していたので、地名もチェンツァと呼ぶようになったというものである。もう一つは、チェンがチベット語では「野獣」という意味で、ツァが「暑い」という意味をするものである。つまり、野獣が生きている暑いところという意味である⁸。

Blo bzang snyan grags (1992 : 179) では、尖扎地方で一番大きなチベット部族である昂拉八庄 (སྤང་རཱ་གྲོང་བརྒྱུད། snang ra'i grong brgyad) の由来について、mnga' bdag khri ral (吐蕃時代の国王レーパチェン) の軍タツァ (ག་ཚ། gra tsha⁹)、ジャツァ (རྩ་ཚ། rgya tsha)、カンツァ (རྐང་ཚ། rkang tsha)、ユイツァ (གཡི་ཚ། g.yi tsha)、チェンツァ (གཅན་ཚ། gcan tsha)、チウツァ (ཚོས་ཚ། chos tsha) の子孫に黄河の河辺を守りに行かせ、今の昂拉八庄はジャツァとチェンツァから成り立っていると述べている。

尖扎県地方志編輯委員会 (2003 : 598-599) では尖扎県の住民は、羌人であると述べ、尖扎県内で発見された卡約文化と馬家窯文化が羌人と関連あると述べている。そして、吐谷渾 (鮮卑人) も尖扎の古代住民であり、吐谷渾をチベット語では hor (ཧོར།) と呼ぶが、今でも尖扎県内にある hor (ཧོར།)、hor dus rigs (ཧོར་དུས་རིགས།)、hor bar shul (ཧོར་བར་ཤུ།) という三つの村はその名残とされている。8世紀、河州地方を含める隴西 (甘肅西部) 地方及び河湟地方、河曲地方は吐蕃の領地であった。今のこれら地域に居住しているチベット族について、尖扎県地方志編輯委員会 (2003 : 598) は羌人と鮮卑人 (吐谷渾)、吐蕃人が徐々に融合した民族であると述べている。

尖扎内部では図1のような伝統的な区分がある。調査地では、今の尖扎県は尖扎陰 (གཅན་ཚེ་སྤོང། gcan tsha srib) と呼ばれ、今の化隆県は尖扎陽 (གཅན་ཚེ་ཉིང། gcan tsha nyin) と呼ばれている。この呼び方に特別な意味はなく、日当たりにより陰と陽に分けて呼んだものである。

⁸ 何年か前、古生物の化石が多く発見され、かつて古生物が存在していたことが明らかになっている。

⁹ 軍隊レベルの単位だと考えられる。

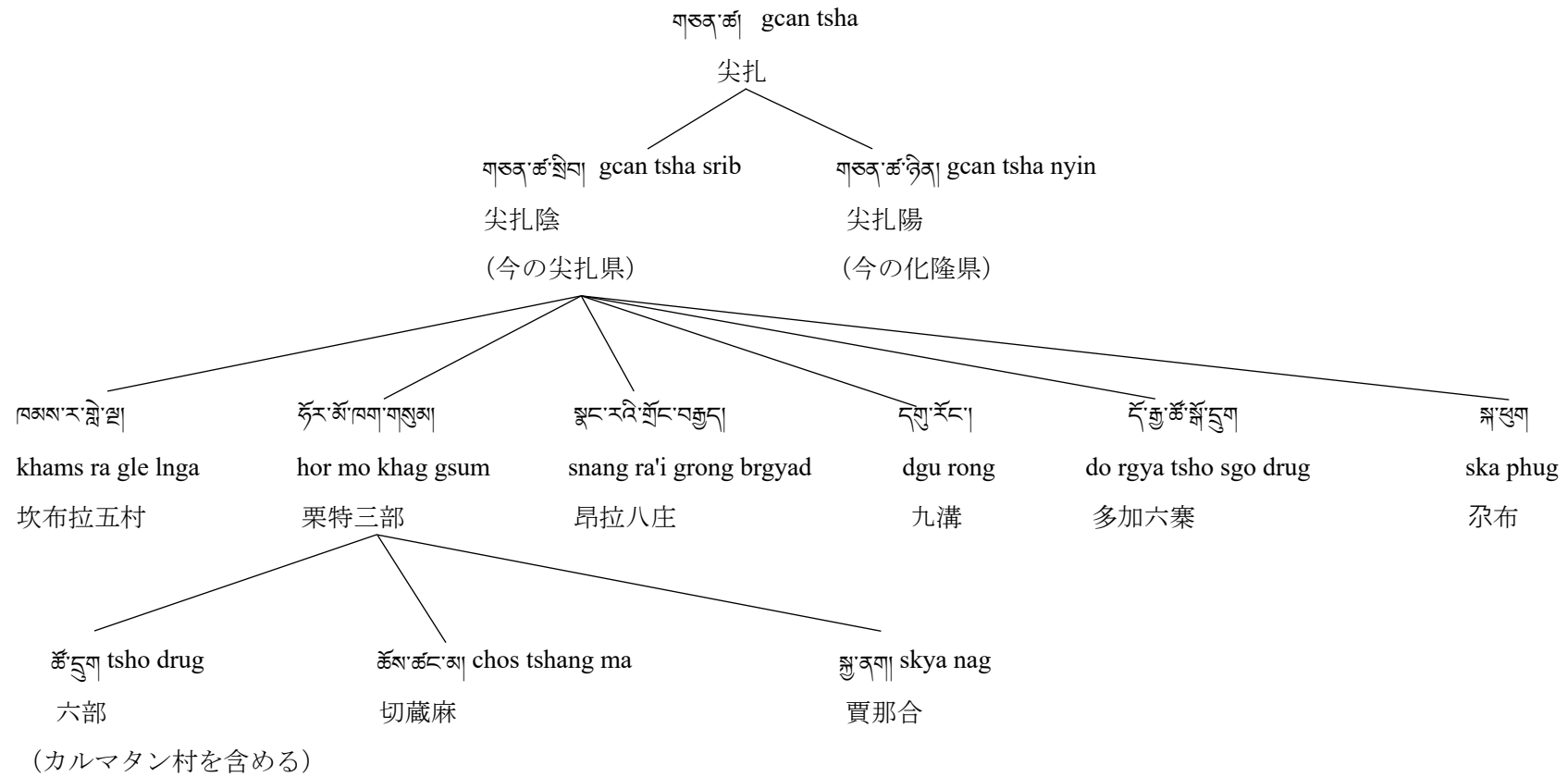


図1：尖扎の伝統的な区分（調査地を中心に）

出典：S氏（男 50代 教師）が提供¹⁰

¹⁰ L氏（30代 男 尖扎公安局の職員）に再確認した。

2.2.2 尖扎県に暮らす各民族とその由来

Dbang grags (2011 : 29) には「尖扎の第一代千戸は 1271 年の zla bzung である。彼は尖扎人であり、尖扎攤の將軍であり千戸でもある」といった元朝の時代すでにチベット族がこの地域で活躍していたことを示す記述がある。その一方で、尖扎県地方志編輯委員会 (2003 : 600) によると、今の尖扎のチベット族部落が漢文の史料に最初に記録されたのは明朝のときとなる。「坎奔族、占砸族 (時には章砸族とも書かれた)」と記され、その内部は二十四族¹¹に分けられ、万の世帯数を有すると述べられている。その尖扎県地方志編輯委員会 (2003) は「坎奔族、占砸族」が「尖扎族」のことであると明確には書いていないが、漢字の発音から「尖扎族」だと推測できる。ただし、当時の「尖扎」という地名は今の尖扎県と化隆県の両方を含めていたので、どこを指しているのかは確かではない。また、上にも述べたが、吐蕃時代の末にチェンツァ「gcan tsha・尖扎」という軍隊があったので、この軍隊の後裔を指している可能性もあると思われる。

尖扎県の回族については、Dbang grags (2011 : 66) が「民初の 1380 年、臨夏から 48 世帯を貴徳へ土屯、軍屯として移住させ、……その東の町 (今の尖扎県) 康、楊、李の屯人は、戦争があると軍人として戦い、平和な時は農業をやって自給自足の生活をしてきた。……1406 年サラール族と回族を貴徳に移住させ、その時にまた回族の一部を尖扎黄河岸に移住させ、開墾して農業をやり始め、だんだん漢蔵蒙回といった四つの民族が集まる所となった。これらの民族は農業と牧業のほかに、狩猟もやっていた。……乾隆 11 年の統計によると、東の町康、楊、李の軍人数は 1,296 人、世帯数は 48 戸」と述べている¹²。

また、Dbang grags (2011 : 66-67) は、尖扎県の回族は漢回 (རྟ་རྟེ། rgya he) と蔵回 (བོད་རྟེ། bod he) の二つに分けられると述べている。昂拉郷 (སྤང་རྟ། snang ra)、加让 (སྐྱ་རང་སྐ། skya rangs) に居住している回族が蔵回と呼ばれ、彼らはチベット語を使い、チベット語による教育を受け、信仰している宗教を除き、当地のチベット族と異なるところはない。漢回の居住地について、黄南蔵族自治州志編纂委員会 (1999 : 183) では、「多くの回族は尖扎県

¹¹ ここの「族」は、民族の「族」ではなく、その当時の「行政区分」の単位である部落・部族のことであると思われる。

¹² 引用文に記された康、楊、李は、それぞれ尖扎県の康家、楊家、李家峽である。

に居住し、その居住地は主に馬克堂鎮、康楊鎮、直崗拉卡」と記されている。尖扎県地方志編輯委員会（2003：605）によると、1990年全県の回族は9,392人、県の総人口の23.22%を占めている。そのなかに康楊鎮（康家と楊家）の回族5,339人、直崗拉卡公社（李家峡周辺の村）の回族2,671人が含まれる。

尖扎県の漢族に関しては、尖扎県地方志編輯委員会（2003：603）によると、唐の初期、馬克唐（今の県政府所在地）に駐屯地が設けられ、それ以降軍屯として漢族が移住してきたが、滞在するものは少なく、残ったものは徐々に当地の民族と融合し、明代以降漢族としての身分が確立したことになる。なお、解放前（1949年以前）に化隆、民和などから移住してきた漢族は康家城上、上庄（楊家上庄村）、坎布拉などに居住している¹³。

尖扎県の漢族は、チベット仏教を信仰している人が多い。特に、チベット族と雑居している漢族はチベット文化の影響を受け、当地のチベット族と異なるところが殆ど見られない。例えば、本研究の調査地であるカルマタン村の漢族は、村の毎年の仏教的な宗教活動に参加し、言語もチベット語を母語とする家庭が多い。

2.3 康楊鎮の概要

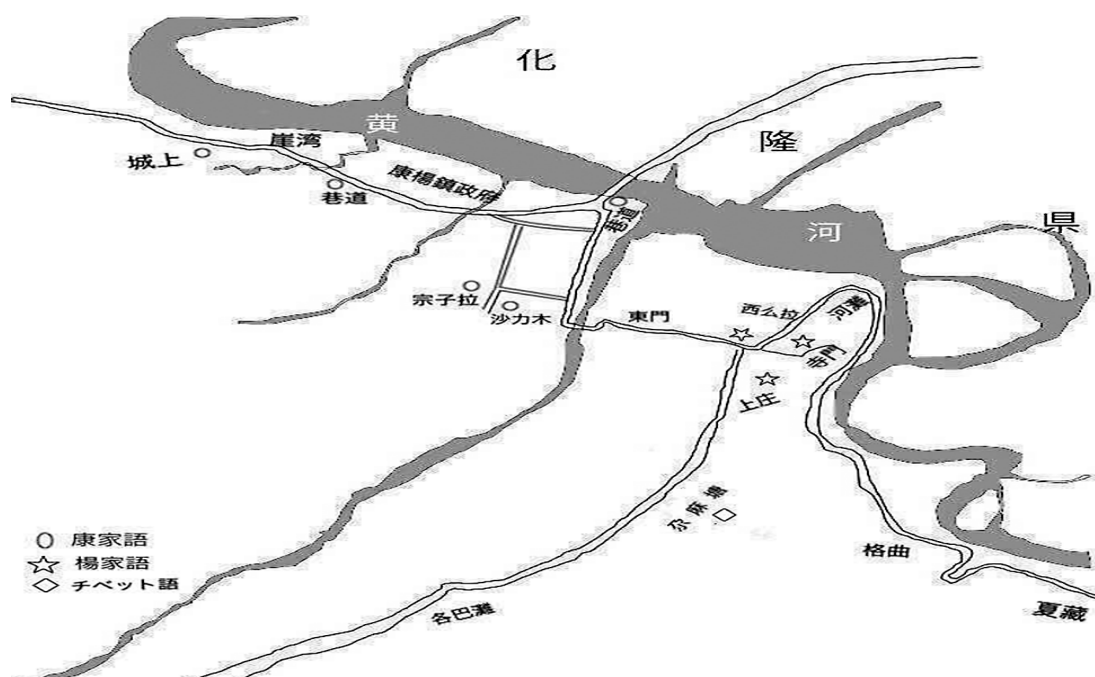
康楊鎮（地図5を参照）は、黄河上流の黄南蔵族自治州尖扎県の東北部に位置する小さな町である。県政府所在地であるマクタンから23キロ離れ、最低海拔は1,960メートル、最高海拔は4,614メートルである。康楊鎮は回族を主とする鎮であり、その回族が全人口の79%を占める。他にチベット族と漢族、少数のトゥ族がいる。康楊鎮は面積35平方キロメートルを有し、13の村からなる。表6は、建国以降における康楊鎮の名称の移り変わりを示したものである。この名称の変遷からも、建国前後から回族が主として暮らしている場所であることが分かる。

¹³ 尖扎県の漢族は主に康家城上、楊家上庄村に居住している。尕布と坎布拉にも少数の漢族が分散して居住している。

表6：建国以降における康楊鎮の名称の推移

年度	名称
1953年	康揚家回族自治区
1956年	康揚回族郷
1958年	康加公社
1961年	康揚公社
1984年	康揚回族郷
1988年	康揚鎮

出典：「<http://baike.Baidu.com/link?url=XO5SipBOqt9UN1C4X1f>」を基に筆者が作成 (2016.6)



地図5：康楊鎮の地図

出典：康楊鎮政府の職員馬氏が書いた地図を基に筆者が作成

康楊鎮は元朝の時代には、黄河対岸のチュンコル（*Ch.*群科、*Tib.*ཇུ་ཁོ་ལྷོ་ལྷོ་ chu 'khor）とともに軍の防衛線に位置し、イスラム教を信仰するモンゴル人（*Ch.*托茂人、*Tib.*ཐོར་དམག་ thor dmag、*Lit.*¹⁴分散している軍人）と漢人、西域色目人から構成された軍隊が駐屯していたとされている。康楊鎮の名の由来は、鎮政府所在地の「康家」とそこから1.5キロメートル

¹⁴ *Lit* は *Literal* の略語である。

を離れている「楊家」の2ヶ所の地名から付けられたものである。「康家」と「楊家」は50メートルの広さの谷に分布し、地理的には非常に近い。

康楊鎮に属する村は表7のようになる。「-」はその表記が存在しないことを表す。

表7：康楊鎮に属する村とその民族構成¹⁵

チベット語表記	漢語表記	民族	世帯 (戸)	人口 (人)	康楊鎮政府所在地までの距離 (km)
-	巷道	回族	285	1,041	0.7
རྒྱ་བྱ་ཚང་། rgya bya tshang	上庄	回族、トゥ族、 漢族、チベット族	157	587	2.5
སྐར་སྒོ་ sgar sgo	寺門	回族	106	495	2.5
ཤར་སྒོ་ shar sgo	東門	回族	187	821	2.1
མཁར་ཐོག་ mkhar thog	城上	回族、漢族	114	468	1.5
གད་ལུག་ gad khug	崖湾	回族	174	644	1.0
སྐེ་ལྷུ་ ske chu	格曲	回族、チベット族	264	1,060	8.0
གམ་གཞུང་། gram gzhung	河灘	回族	140	570	3.0
ས་ལེབ་མོ། Sa leb mo	沙力木	回族	260	1,426	0.6
ཙོང་འཇུག་ས་ར། tsong 'dzugs ra	宗子拉	回族	224	980	1.8
སྐར་མ་ཐང་། skar ma thang	尕麻塘	チベット族、漢族	182	614	4.5
ཞིས་ལིན། zhis lin	西么拉	チベット族、回族	158	590	2.5
ཤ་བཟང་ཐང་། sha bzang thang	夏藏	回族	48	273	15

所典：「2016年康楊鎮城郷居民基本医療保険参保任務分解表」を基に筆者が作成

¹⁵ 「巷道」以外の各村はチベット語の村名を有している。「西么拉」と「宗子拉」の語源は不明である。

2.4 カルマタン村の概要

カルマタン村は県政府所在地マクタンから康楊鎮までミニバスで40分、鎮から歩いて30分かかる。村の南部は回族の各巴灘村、北部は漢族が主となる楊家上庄村と接し、普段は民族間の共通語として漢語青海方言とチベット語アムド方言が使われている。伝説によると、元朝の時代モンゴル人が一時的にこの村を占領したことがあり、そのときモンゴルのゲルが夜空の星ほど多かったので、カルマタン (*Lit.* 星平地) と呼ぶようになったと言われている。

Dkon mchog bstan pa rab rgyas, Brag dgon pa (1982 : 292) には、グワ・ゴンパの歴史を記した箇所にカルマタンという名が出てくるが、出てくるのはその名前だけである。Snying lcags (2011 : 488) と尖札県に属する各村の歴史を記した Dbang grags (2011 : 261) を見ても、上述したカルマタン村の名の由来が書かれているにすぎない。

康楊鎮政府で得たデータに従うと、現在カルマタン村は182世帯、そのうち漢族の家庭は29世帯となる。村の総人口は614人¹⁶。ただし、カルマタン村の民族区分は以下に述べるように曖昧である。

伝統的にカルマタン村は、表8のようにラディ (ལྷ་སྡེ། lha sde) とホンツァン (དཔོན་མང། dpon tshang)、ジョンジョン (མོང་མོང། cong cong) の3つに区分される。

¹⁶ カルマタン村の世帯について、康楊鎮政府に登録している世帯数と村人から得た世帯数と一致しないが、本論文では政府の統計に従う。

表8：カルマタン村の構造

集団	民主改革 ¹⁷ (1958年) 前の位置づけ	民族と世帯数	地理
ラディ	ゲラ ¹⁸ のために働く	チベット族：90世帯 漢族：12世帯	ゲラのために働く
ホンツァン	自立していた集団	チベット族：20世帯 漢族：9世帯	自立していた集団
ジョンジョン	自立していた集団	チベット族：21世帯 漢族：8世帯	自立していた集団

ラディ (ལྷ་སྡེ། lha sde) は、ラ (ལྷ། lha) 「神様」とディ (སྡེ། sde) 「村」から構成される語である。Zhang (2010 : 3084) では、「寺院に属する部衆・民衆¹⁹」と解説している。ホンツァン (དཔོན་ཚང། dpon tshang) のホン (དཔོན། dpon) は「王」の意味であり、ツァン (ཚང། tshang) は「家」の意味である。Zhang (2010 : 1642) は「官家²⁰」と解説している。今、ホンツァンは地名となっている。ジョンジョン (ཅོང་ཅོང། cong cong) の意味は不明であり、その出自はチベット語ではないと思われる²¹。

カルマタン村の民族区分は、例えば、調査対象である王徳有の家族の場合、筆者が実施したアンケート調査に従うと、戸籍上の民族はみな「漢族」となる。しかし、康楊鎮政府のデータでは王徳有はチベット族であり、他はみな漢族となる。その一方で、孫の一人は、自ら戸籍上はチベット族であると語っている。

この三つの集団がカルマタン村として一つに統合されたのは民主改革 (1958年) 以降の

¹⁷ 1958年、青海省チベット地域では土地改革が行われた。それとともに、尕藏杰 (2016 : 29) に「青海省チベット地域で長い歴史の間維持してきた万戸や千戸、百戸の各部族の政権や寺院の『政教合一』制度などを廃棄した」とある。

¹⁸ Pad ma rdo rje (1989 : 166) は「ゲワ、あるいはゲカは1958年の民主改革前のラマや地主の家を指す」と述べている。カルマタン村調査地はゲラという。

¹⁹ Zhang (2010 : 3084) に「lha sde/ sngar dgon pa khag gi khongs su gtogs pa'i sde 'bangs/ 寺廟部衆。旧社会由各寺廟領主是所管百姓 (旧社会において各寺院の領主によって管理された庶民)」と記されている。

²⁰ Zhang (2010 : 1642) に、「dpon tshang/ dpon pa'i khyim / 官家、仕宦之家 (地主の家)」と記されている。

²¹ 村人に聞いたが、分かる人はいなかった。

ことと思われる。「ラディ」は上述のように、民主改革前は寺院のために働く民衆あるいは集団名であった。「ゲラ」はラマ（高僧）の出身家庭のことで、村内で比較的高い身分であり、大きな耕地と何人かの使用人を持っていた。これらの身分は民主改革後なくなり、すべて平等になった。

表8のホンツァンと接する回族のグワタン村は20年前、「康家」の東門村から移住した17世帯の回族から成り立っている。グワタンはチベット語では Ko'u ba thang (ཀོ་ལུ་བ་ཐང་།) といい、かつてグラ・ゴンパ（寺院）の所有地であった。行政上の区分では表7の民族構成からも分かるように、カルマタン村に属していない。

2.5 カルマタン村で使われている各言語

カルマタン村で使われている言語はチベット語アムド方言と漢語青海方言と漢語普通話の三つである。2.5.1節では、チベット語アムド方言の特徴をウーツァンのラサ方言と比較しながら説明する。2.5.2節では、漢語青海方言の特徴を漢語普通話と比較しながら説明する。

2.5.1 チベット語アムド方言

チベット語は、チベット・ビルマ語群に属する言語である。その使用範囲は中国の藏族自治区とそれをとりまく青海、甘肅、四川、雲南の各省とパキスタン、インド、ネパール、ブータン等の隣接諸国の大ヒマラヤ山脈沿いの地域である（西 1987 : 170）。中国国内で使われているチベット語は、伝統的にウーツァン方言、カム方言、アムド方言の三つに分けられ、中国領内全体の使用人口は格桑居冕・格桑央京（2002 : 2）に従うと、約 459.3 万人となる。そして、アムド地方の人口について Pad ma lhun grub（2009 : 42）は「2005 年の統計によると、アムド地方の人口は約 180 万であり、チベット族の総人口の 30%を占めている」と述べている。

チベット語アムド方言は伝統的に牧畜地帯方言（འབྲོག་སྐད། 'brog skad）と農耕地帯方言（རང་སྐད། rong skad）、半農半牧地帯方言²²（རང་མ་འབྲོག་གི་སྐད། rong ma 'brog gi skad）のように生産

²² Stag rig rta mgrin rgyal（2016 : 124）は「rong 'brog 'jam gsum zhes pa'i nang gi 'jam ni 'jam pa bya ba ste/_rong ma 'brog gam zhing phyugs mnyam por skyong ba'i bod sde la de ltar 'bod/_'bod stangs 'di gtso bo mtsho sngon gyi rma chu'i byang rgyud kyi bod mi'i khrod du dar che zhing /_yul 'di'i 'jam pa rnam las rigs kyi cha nas rong

を基準にして区分し、話し相手の下位方言が異なっても、コミュニケーションを取るには問題がない。その所属方言は表9のようになる。

表9：チベット語アムド方言の区分

	下位方言	所属方言
アムド方言	牧畜地帯方言	①古牧畜地帯の方言：果洛瑪多県、班瑪県、瑪沁県。玉樹曲麻萊県、雜多県。四川省阿壩、色達、松藩県、若爾蓋県、壤塘県など ②新牧畜地帯の方言：青海省海南、海北、海西、黄南の牧畜地帯など
	半農半牧地帯方言	青海省黄南蔵族自治州同仁県、甘肅省甘南蔵族自治州夏河県など
	農耕地帯方言	青海省海東の化隆県、循化県、海南、黄南などの黄河沿いの農耕地帯、甘肅省天祝県など

出典：Don grub tshe ring (2011：272-273) を基に筆者が作成

チベット語アムド方言は保守的であり、チベット語の古い形態を保存している方言である。例1は、Don grub tshe ring (2011：481) を参考し、筆者が修正をしたものである。この例からラサ方言とアムド方言の相違点を示す。

例1 文語：ཁྱེད་རང་ལྷ་སར་ཡོང་ན། དབྱར་དུས་ཡོང་ན་ལེགས།

[khyed rang lha sar yong na/dbyar dus yong na legs/]

par gzhol che na yang /_skad cha dang lugs srol mang po 'brog pa la gtogs pa yin/ (rong 'brog 'jam の'jam は'jam pa のことであり、半農半牧または農業と牧畜に従事しているチベット村をそう呼ぶ。この呼び方は主に青海省の黄河北方のチベット地域で使われている。この地域の'jam pa は主に農業に従事していても、方言と習慣などは主に牧畜地帯に従っている)」と記されている。

ラサ方言：ཁྱེད་རང་ལྷ་ས་ཡོང་ན། དབྱུང་ཁ་ཡོང་ན་ཡག་གི་རེད།

[cheʔ⁵³raŋ⁵⁵ la⁵⁵sa⁵⁵ jon¹³na· ja⁵⁵kha⁵⁵ | jon¹³na· jaʔ¹³khi⁵³reʔ¹³²]

①

②

③

④

アムド方言：ཁྱེད་ལྷ་ས་ཡོང་ན། དབྱུང་ཁ་ཡོང་ན་ཉ་གི

[teho la sha jon na hjar hka jon na sa yə]

①

②

③

④

「君がラサに来るなら、夏に来た方がいい。」

(1)声調

ラサ方言には声調があるが、アムド方言には声調がない。

(2)音韻

例1の②と③からラサ方言とアムド方言の音韻が異なることが分かる。以下、順に説明しておく。

②ラサ方言：la⁵⁵sa⁵⁵ アムド方言：la sha

チベット文語の lha sa の s がアムド方言では、ラサ方言とは異なり有気音 sh に対応している。

③ラサ方言：ja⁵⁵kha⁵⁵ アムド方言：hjar hka

チベット文語 dbyar kha に認められる前置字 d と基字 b はすでに消失しているが、アムド方言では前置字 d しか消失していない。

(3)語彙

例1の①と④から、ラサ方言とアムド方言の敬語と各語彙の使い方の異なる点が見られる。

①ラサ方言：cheʔ⁵³raŋ⁵⁵ アムド方言：teho

チベット文語の khyed rang は khyod の敬語に対応する。ラサ方言では敬語をよく使い、

例の cheʔ⁵³raŋ⁵⁵ も日常で使われている。他方、アムド方言では敬語はラマなどの宗教関係者にしか使わない。

ラサ方言：	普通語	敬語	
	ཐུ /tehu ⁵³ /	ཆབ/tehap ⁵³ /	水
	ཁྱེད/chøʔ ⁵³ /	ཁྱེད /cheʔ ⁵³ /	君
	ཐྱེས/ceʔ ⁵³ /	འཁྲུངས/tʂhunj ⁵³ /	生まれ
	མྱེད་པོ་/ci ʔ ⁵³ po ⁵³ /	སྤོ་པོ་/tʂo ⁵³ po ⁵³ /	喜ぶ
	རྩ་/ŋa ⁵³ /	ཕྱག་རྩ་/tʂhaʔ ⁵³ ŋa ⁵³ /	太鼓
	བཞུད་/tɛʔ ¹³ /	བཞུགས /euʔ ¹³ /	いる (座る)
	མཚོ་གསལ་པོ་/coʔ ¹³ ko ⁵³ /	ཚོ་པོ་/tʂo ⁵³ po ⁵³ /	早く

ほかに、以下のような敬語もある。

普通語	普通敬語	最高敬語	
ལ་ལག /kha ⁵⁵ laʔ ⁵³ /	ལལ་ལག /ɕɛ ¹³ laʔ ⁵³ /	གསོལ་ཚོགས /sy ⁵⁵ tʂhi ʔ ⁵³ /	顔・手
འགྲོ /tʂo ¹³² /	ཕེབས /pheʔ ⁵³ /	ཆེབས་སྐྱུང་གནང /tʂhi ⁵⁵ cu ⁵⁵ naŋ ⁵⁵ /	行く
རྩ་ཤེས /ŋo ¹³² ɕɛ ⁵⁵ /	རྩ་མཐུན /ŋo ¹³² chɛ ⁵⁵ /	ལལ་ཚུགས /ɕɛ ¹³ tʂhuʔ ⁵³ /	知り合い

(Don grub tshe ring 2011 : 99 を基に筆者が修正)

アムド方言は上述したように、敬語を使う習慣をほとんど持っていないため、日常で使われている敬語も非常に少ない。

アムド方言	普通形	敬語形	
	མགོ /n.go/	/veu/	頭
	མིག /nyEttok/	/htcen/	目
	ལག /lokkwa/	/cek/	手
	སོང་ཡོང /ndjo,yong/	/hep/	行く・来る
	བཤད /cel/	/son/	話す

(海老原 2006 : 7-11 を基に筆者が作成)

④ラサ方言：jaʔ¹³ khi⁵³ reʔ¹³² アムド方言：ʂa ʋə

例1のラサ方言のjaʔ¹³ khi⁵³ reʔ¹³²は「良い」という意味であるが、アムド方言のjyx kəは「きれい」を意味し、ʂa ʋəが「良い」を意味する。

以下は、ラサ方言とアムド方言の各方言で使われている独特の語彙である。

ラサ方言	アムド方言	
བག་ལེབ་ /pha ¹¹ leʔ ⁵² /	ཀོ་རེ་ /kore/	グリ (パン)
ཨ་ཙོ་མ་ /a ⁵⁵ teo ⁵⁵ /	ལག་ཕྱིས་ /lak ei/	タオル
ཞེད་ /ceʔ ⁵³ /	མྱེག་ /hteak/	怖い
མཚོགས་པོ་ /tʂha ⁵⁵ ko ⁵³ /	ཤ་མོ་ /ʂa mo/	硬い

(Don grub tshe ring 2011 : 99 を基に筆者が修正)

2.5.2 漢語青海方言

漢語青海方言（以下青海方言にする）は青海省で使われている漢語のことである。この方言は漢語北方方言に属し、青海方言内部では、さらに西寧方言と楽都方言の二つに分けられる（陳・李 2012 : 19）。その使用者は主に漢族と回族である。

以下では、青海方言の特徴を(1)語順と(2)音韻、(3)語彙の順に述べておく。

(1) 語順

青海方言は、例1のように一般の漢語方言の語順 SVO と異なった SOV 語順を用いている。

例1：你茶喝，馍馍吃。

[ni⁴⁴ ts^hA²⁴ xu⁴² mo²¹ mo¹³ tʂ^hʅ⁴²]

「君、お茶を飲みなさい、マントーを食べなさい。」

(川澄 2012 : 52 を基に筆者が作成)

(2)音韻

青海方言ではそり舌音「ʂ」が「f」に対応する時がある。その発音記号の下には、線を引いてある。

例2：家不来了说。

[tejA²⁴ pɥ¹³le²¹ ljo²¹ fɔ̄³¹]

- a. 「彼は『来なくなった』と言った」
 b. 「彼は来なくなったそうだ。」(川澄 2012 : 62 を基に筆者が作成)

例3：致个帽子谁的是啊?

[tʂɥ²¹ kɔ̄³ mo²¹ tsɿ¹³ fi²¹ tsɿ³ sɿ⁴⁴ lja²¹]

「この帽子は誰のですか？」(川澄 2012 : 79)

例4：水桶我扎儿放给。

[fi²¹ t^hwə̄³ no⁴⁴ tʂA⁴³ ε² fɔ̄²¹ kɿ³]

「水桶は私のところに置きなさい。」(川澄 2012 : 79)

例5：书我哈接给。

[fɥ⁴⁴ no⁴⁴ XA²¹ tei⁴⁴ kɿ⁴⁴]

「本を私に渡して。」(川澄 2012 : 80)

「ʂ」が「s」に対応する時もある。

例6：你啥地方的人是啊。

[ni⁴⁴ sA²⁴ tsɿ²¹ fɔ̄⁴⁴ tsɿ³ zɛ̄²⁴ sɿ²¹ lja³¹]

「あなたはどこの人ですか？」(川澄 2012 : 63)

例7：小王青海人不是，陕西人是啊。

[ɛjo⁴⁴ wɔ̄²⁴ tɛ^hji²¹ xɛ⁴⁴ zɛ̄¹³ pɥ²¹ sɿ¹³ ʂā⁴⁴ ʃɜ̄²¹ zɛ̄¹³ sɿ²¹ lja²¹]

「王君は青海出身ではなく、陝西出身です。」(川澄 2012 : 60)

例8：家一老按时不上班。

[tejA²⁴ ʒ²¹ lo:⁴⁴ nã²¹ s̩³ pɥ²¹ ʂɔ̃²¹ pã³³]

「彼はいつも時間通りに出勤しない。」（川澄 2012：60）

例9：早你试当给一挂，看成哩吗不成。

[tsɔ⁴⁴ ni⁴⁴ s̩²¹ tɕ⁴ ki³ ʒ²¹ kwA²¹ k^hã¹³ tɕ^hɛ²¹ ,l¹ mA³ pɥ²¹ tɕ^hɛ¹³]

「いまちょっと試してみなさい、いいか悪いか見てみなさい。」（川澄 2012：64）

他に、青海方言の「ts」「ts'」「s」は「y」とは組み合わせるが、「u」と組み合わせられない。普通語の「zu、cu、su」と「jü、qü、xü」が青海方言では「tsy、ts'y、sy」に対応する。

「tsy」 聚、句、居、举

「ts'y」 取、曲、渠、娶

「sy」 许、叙、续、虚（陳・李 2012：37）

また、前置子音「n」と「l」が時には混用する。例えば、臉（lian）と眼（ian）をとともに「nian」で読むことがある。

(3) 語彙

「尕」は青海方言では「小」に対応する。例10は賈（2006：110）を修正したものである。

例10：尕拉名儿

[ka²⁴ la⁴⁴ miã⁴⁵ɛ]

最后一名

尕面片

[ka³⁵ miã²¹³ p'ia⁵⁴]

小面片

尕脖蛋

[ka²⁴ p'ɔ⁴⁴ ta²¹³]

小孩子

尕兵

[ka³⁵ piã⁴⁴]

小兵士

青海方言では、周辺の少数民族言語からの借用語も使われている。

例 11 : チベット語 : 曲拉 糌粑 奥马 加统
 チーズ ツァンパ ミルク お茶を飲む

 モンゴル語 : 亚马 冒儿 西纳哈 那达慕
 ヤギ 馬 スプーン ナーダム

(賈 2006 : 111-112 を基に筆者が修正)

第3章 漢族家庭の言語使用状況²³

²³ 第3章は周楊措（2019a）と'Brug g.yang mtsho（2018）を基に書いたものである。

本章では、カルマタン村の漢族のまま残っている王徳有の家庭の言語使用状況を考察する。

3.1 節では、カルマタン村の漢族の移住の歴史的過程を述べる。3.2 節では、漢族家庭の言語使用について分析を行う。3.3 節では、カルマタン村の漢族家庭の特徴について、チベット化の程度に従い三つに分けて分析する。3.4 節では、カルマタン村の漢族家庭の一つである王徳有の家庭について、その基本データ、家族それぞれの言語能力と日常の言語使用について述べ、さらに、各世代の言語能力と言語使用について検討する。そして、3.5 節では本章で述べてきたことをまとめる。

3.1 漢族の移住過程

以下にカルマタン村の漢族の移住過程をまとめておく。ジョンジョン・ヤカ²⁴の D 氏 (60 代 男)、ジョンジョン・マカの R 氏 (70 代 男)、ホンツァンの D 氏 (50 代 男)、ヨンズ・ジャの O 氏 (70 代 男) と元村長 N 氏 (70 代 男) から聞き取り調査によって得た資料に基づいている。

カルマタン村に居住している漢族の移住は、主に二つの時期に分けられる。最初の移住は1918年のことである。西寧盆地東部の楽都からカルマタン村へ一家族が移住してきた。移住当初、彼らはゲラの「ヨンズ・ジャ」（家内労働者）として生活していた。「ヨンズ・ジャ」は漢語の「院子（ヨンズ）」と、「漢」あるいは「漢族」を意味するチベット語の「ジャ」から構成され、「庭の管理をする漢族」を意味する。この「ヨンズ・ジャ」はカルマタン村で一番歴史の古い漢族家族であり、漢族家庭の7割と親戚関係がある。

その次の移動は1950年代末の人民公社、生産隊を組織した時代のことであり、当時三家族が移住してきた。カルマタン村は人民公社²⁵を組織したとき、村の畑が広すぎて労働

²⁴ ヤカは「上」の意味であり、そのすぐ後に出てくるジョンジョン・マカのマカは「下」の意味である。

²⁵ 生産隊時代の時の生活について、カルマタン村の漢族の女性 SH 氏 (78 歳) が大躍進・人民公社時代の飢餓状態について、泣きながら以下のように話してくれた。

「小さいとき、ゲラの家の掃除とかをやっていた。そのとき衣食はゲラが提供してくれるので、お腹が空いたことはなかった。1958年人民公社時代に入ってから、よくお腹が空いていた。一日中働くうえ、三食とも大食堂で提供される薄いスープしか飲めなかった。たまに、遅れてしまうと何も食べられなかった。」

力が足りず、村の周辺の農地を同じ生産大隊に属する楊家に耕作を依頼した²⁶が、それでも労働力が不足がちであったため、外部からの移民を歓迎した。三家庭はその時移住してきたという。これら漢族家庭は、1918年に移住してきた漢族と異なり、農耕のかたわら大工、鍛冶屋として家計を維持していた。今日、木を伐採することは違法となるうえに、木材で家を建てる家庭が少なくなっているため、大工は廃業している。鍛冶屋は今でも金属製の門やストーブなどを作っている。

3.2 漢族家庭の言語使用

カルマタン村の漢族家庭は29世帯である。これらの家庭はチベット化（3.3節を参照）の程度によって、家庭内の言語もチベット語アムド方言か漢語青海方言かになり、また二言語を混ぜて使う現象も普通に見られる。

この村の漢族たちが家庭内でどの言語を使い、その言語を使うときその言語を使っているという意識があるのかどうかをはっきりさせるため、筆者はまずアンケート調査を通して家庭内で用いる言語を把握した。そして、次に「A：いつも使っているチベット語アムド方言のなかに漢語青海方言は入っていますか」、「B：いつも使っている漢語青海方言のなかにチベット語アムド方言は入っていますか」という二つの質問をした。この質問を用いる理由は、これらの家庭はチベット化の程度が多少異なり（3.3節を参照）、それと共に民族の所属意識も異なるため、家庭内の言語使用は直接聞くことはできないからである。そのため、上の二つの質問を用い、そのどちらを答えたかを表10にまとめた。カルマタン村の三つの集団によって、その使用状況にも違いがあるため、表10には三つの集団ごとに整理してある。

²⁶ 今でも、楊家の所有農地として、楊家の人たちが農耕し続けている。

表10：カルマタン村の漢族における家庭内の言語使用

集団	家庭内の言語使用			
	A		B	
	入ってない	入っている	入ってない	入っている
ホンツァン	2世帯	0世帯	4世帯	3世帯
ラディ	5世帯	6世帯	0世帯	1世帯
ジョンジョン	0世帯	4世帯	0世帯	4世帯

いつも使っているチベット語アムド方言に漢語青海方言が入ってないというホンツァンの2世帯はラディと接するところに居住する、「漢族のまま」の家庭である。また、チベット族の集中度が高いラディの漢族家庭のうちの5世帯も漢語青海方言は入っていないと答えている。

いつも使っているチベット語アムド方言に漢語青海方言が入っているというのはラディ6世帯と、ジョンジョン4世帯である。ラディの6世帯はいずれも高齢者がいる家庭であり、もともとは漢族だったという民族意識²⁷をはっきりもっている。ジョンジョンの4世帯はラディの漢族ほどチベット語アムド方言が流暢ではないが、若い世代から母語はチベット語アムド方言となり、家庭内でチベット語アムド方言しか使っていないという。

漢族家庭で漢語青海方言のみを使う家庭はホンツァンでの4世帯だけであり、これらの家庭はカルマタン村とグワタン村の村境に居住し、家族全員漢族であるため、家庭内では漢語青海方言しか使っていないという。

漢語青海方言にチベット語アムド方言が入っているというのはホンツァン3世帯と、ラ

²⁷ 本論文で取り上げた調査対象の民族所属については、自己認識による民族（民族意識）と戸籍上の民族の二つに分けて記述している。ここの自己認識による民族は、調査対象者が自己申告した民族のことである。そして、戸籍上の民族は鎮政府に登録してある民族のことである。このように二つに分ける理由は、自己申告の民族と戸籍上に登録してある民族とが一致しないからである。調査地の村人は政府が少数民族に対して行う優遇政策を目指し、一旦少数民族と結婚するとその次世代の民族籍を少数民族にする習慣を持っているためである。これは主に、漢族の家庭または漢族と族際結婚をしているチベット族の家庭によく見られるケースである。

ディ1世帯、ジョンジョン4世帯である。まずホンツァン3世帯の共通点は家族でチベット語アムド方言ができない人がいるため、家庭内では主に漢語青海方言を使っている。ラディの1世帯もホンツァンと同じ理由であった。ジョンジョンの4世帯のうち、2世帯は高齢者のいる家庭であり、その高齢者の民族意識が強く、残りの2世帯は周辺の村人との接触が少ないが、家族全員が漢語青海方言とチベット語アムド方言が自由に切り替えられ、家庭内では主に漢語青海方言を使っているという。

要するに、カルマタン村において漢語青海方言だけを使っているのは4世帯だけである。

ラディの漢族を主として17世帯の漢族の母語はすでにチベット語アムド方言となっており、漢語青海方言を話せる人は高齢者に限られている。彼らは家庭内で、民族学校出身の子供はチベット語アムド方言を使い、教育を受けたことがない家庭の子供はチベット語アムド方言に漢語青海方言を混ぜて使っている。

漢族のチベット化が著しいのに、なぜホンツァンの漢族のなかに漢語青海方言だけを用いる家庭が存在するのであろうか。その理由は、ホンツァンの家屋がやや離れた場所に集まっていること、そして婚姻関係も村内ではなく楽都など他地域の漢族と結んでいることにある。

3.3 漢族家庭の特徴

カルマタン村の漢族家庭は上述したように各家庭によって、家庭内の言語使用がそれぞれ異なっており、その原因は居住位置と婚姻関係にある。つまりは、チベット族との接触による「チベット化」と関連していると言えよう。

ここで、「チベット化」について定義しておきたい。「チベット化」とは、先祖が漢族である家庭が、チベット族と族際結婚及び雑居によって、言語・生活習慣・民族意識がチベット族と異なることがないところにまで至っている民族状況を指すと定義しておきたい。

本章で取り上げたカルマタン村の漢族は長期間チベット族と居住しているので生活習慣的には村のチベット族とほとんど異なるところがない。そのため、本章では漢族家庭の「チベット化」を述べる時、母語がチベット語アムド方言であるのかどうか、あるいは、民族意識的にチベット族であるかどうかを基準にして「チベット化」の程度を表11のように分けて述べていく。例えば、嫁がチベット族である場合、生まれた子の母語はチベット

語アムド方言であるのは言うまでもないが、漢族の苗字を継承している家庭だと、漢語とチベット語の両方の名前をつける家庭が多い。しかし、若い世代の民族意識は曖昧である。他方、祖父母の時代からチベット族との族際結婚を行っていた家庭だと、漢語が流暢に話せないうえ、漢族の苗字継承も失っている家庭もあり、若い世代にもチベット語の名前しか付けていない。こういう家庭の若者は先祖が漢族だったということが分かってない場合もある。

カルマタン村の漢族家庭の特徴をまとめると、「チベット化」の程度により、表 11 のように三つに分けられる。表 11 は、2016 年の 8 月と 9 月に行った調査において、アンケート調査で各家庭の基本状況を把握した後、聞き取り調査及び参与観察によってデータの正確性を高めたものである。

表 11：漢族の同化程度

同化程度	特徴	世帯数	所在地
1) 「チベット 化」している	<p>高齢者がいる家庭</p> <p>①高齢者の民族籍は漢族のままであるが、民族意識的にはチベット族である。若い世代は民族籍も民族意識もチベット族である。</p> <p>②名前は、高齢者は漢語であり、若い世代はチベット語である。</p> <p>③嫁はチベット族である。</p>	11 戸	ラディ
	<p>高齢者がいない家庭</p> <p>①民族籍がチベット族になっていて、「漢族」と言われると、差別されていると怒る。</p> <p>②名前は家族みなチベット語の名を付けている。</p> <p>③嫁はチベット族である。</p>		
2) ジャマウオ	<p>①高齢者の民族籍は漢族のままで、民族意識的にも漢族である。若い世代の民族籍はチベット族で、民族意識は「ジャマウオ」である。</p> <p>②名前について、男の子は漢語とチベット語の二つの名前を持っている。</p> <p>③嫁はチベット族である。</p>	12 戸	ジョンジョン・ ホンツァン・ ラディ
3) 漢族のまま	<p>①民族籍は漢族のままである。</p> <p>②名前は、家族みな漢語の名前である。</p> <p>③嫁は漢族である。</p>	6 戸	ホンツァン・ ジョンジョン

以下、特徴について詳細に述べる。各世代の分け方は、祖父母が第一世代、両親が第二世代、子どもが第三世代である。

1) 「チベット化」している家庭は、言語的にも文化的にもチベット族と異なるところがなく、「漢族」であることを意識的に隠したいという気持ちを持っている家庭である。これらの家庭は高齢者がいるかどうかで、さらに二つに分けることができる。高齢者がいない家庭は民族籍も民族意識も完全に「チベット化」している。これらの漢族の家庭内言語はチベット語アムド方言であり、若い世代は漢語青海方言が話せない。高齢者は子供のとき漢語青海方言とチベット語アムド方言を使っていたため、発音に違和感がない。各家庭の共通点としては、嫁が全員チベット族であることが挙げられる。嫁の存在で家庭内の言語はチベット語アムド方言になったうえ、子供にもチベット語の名を付けている。漢族の「苗字」継承については、「名前よりも子供の健康が重要だから、ラマに頼んで良い名前をもらった」と一致した答えが返ってくる。第一世代は、漢語の名と漢族の民族籍であり、両親とも漢族だったが、チベット村出身なので、チベット族と違うところがないという。第二世代は漢語とチベット語の二つの名前を有し、民族籍はチベット族になっている。チベット語アムド方言の他に漢語青海方言が聞き取れるレベルであり、民族籍について、名前も戸籍上の民族もチベット族になっているという。第三世代は、名前はチベット語であり、母語としてチベット語しか話せない。民族籍についても、躊躇なく「チベット族です」と答えている。

完全に「チベット化」している漢族の家庭は、上述のような高齢者がいない家庭であり、家族全員が「チベット族」であるという意識が強い。外部の漢族のことを「ジャゲン (ཇམ་གཅེན་པོ། rgya rgan)」と調査地で漢族を差別する言い方を使い、自分がチベット族であることを強調する。チベット族の集中度が高いラディに居住している漢族は、周辺のチベット族からの影響で、完全に「チベット化」しているか、あるいは、間もなく「チベット化」する家庭である。今「チベット族」になっていることを強く主張し、村から出ると意識的に「漢族」の身分を隠す行為がある。

2) ジャマウオの漢族の家庭は、ジョンジョンの6世帯とラディの1世帯、ホンツァン5世帯である。1) と異なるのは、第三世代の母語はチベット語アムド方言であり、祖父母には漢語青海方言を使い、両親にはチベット語アムド方言を使うという点である。漢語青海方言とチベット語アムド方言の使用率は家庭によって異なる。第一世代と第二世代の言語能力は1) の第一世代と第二世代と同じレベルだが、家庭内では第一世代は、息子と孫には漢語青海方言を使用している。なぜ家庭内の言語が漢語青海方言のまま保っているのか。これについてジョンジョンのZH (60代 女) は「私と旦那は漢族だが、孫たちがジ

ヤマウオになっている。でも、やっぱり漢族だから家庭内では漢語青海方言で話している。」
といている。

「ジャマウオ」という用語について説明しておきたい。「ジャマウオ」の「ジャ (rgya)」は「漢人・漢族」を表し、「マ (ma)」は否定語であり、「ウオ (bod)」は「チベット・チベット族」を表す。つまり、チベット化した漢族、すなわち、純粹ではないチベット族を表す蔑称である。「ジャマウオ」という名称は自称より他称としてよく使われている。康楊鎮は多民族が雑居している地方だが、どの民族出身なのかははっきり分けられている。こうした社会背景のもとで、漢族とチベット族のもとで生まれた子供は「チベット族であるが、本当のチベット族ではない」という区別の意味が入っている。

ジョンジョンでは、第三世代が男子の場合、漢語とチベット語の二つの名前を持っている。漢語名は家系を伝承するために祖父母から付けてもらった名前であり、チベット語の名はラマからもらった名である。家庭内では漢語名を使い、学校ではチベット語の名を使っている。

「ジャマウオ」の家庭の特徴として、第三世代は二重の民族性が見られるが、第一世代は自分の帰属意識を強調するため、家庭内では漢語青海方言を使い続け、第三世代に対しても漢族としての姓の伝承を望んでいることがわかる。第二世代の民族籍はチベット族になっているが、日常はチベット語アムド方言と漢語青海方言、漢語普通話の多言語を併用している。自らの民族についても、話し相手によって、漢族と答えたりチベット族と答えたりしている。第一世代ほど民族の帰属意識は強くないといえる。

2) は1) との共通点が多いが、チベット化を積極的に受け入れていないところが異なる。これはジョンジョンとホンツァンの居住区域の違いと関係があることを分かる。ただ、それよりもそれぞれの帰属意識がもっと重要な原因であると考えられる。

3) 漢族のままの家庭は、ホンツァン 4 世帯とジョンジョン 2 世帯である。ジョンジョンの 2 世帯は、20 年前に隣人のチベット族と衝突があり、ジョンジョンのチベット族から孤立している。ここでは主にホンツァンの漢族家庭について述べたい。民族的にも、言語的にも変化がなかった原因として考えられるのは、ホンツァンの漢族は漢語青海方言を共通語として使用している回族のグワタンと接し、特に用事がないときはチベット族と付き合い合わないことが挙げられる。ホンツァンにも「チベット化」している家庭があるが、いずれもラディとホンツァンが接するところに居住している。つまり、「漢族のまま」残っている漢族の家庭は、カルマタン村の村境に住み、人間関係が村内部より回族のグワタン村

により近いといえよう。そして、楽都との親族とも繋がりが強く、経済的には村の他の漢族家庭より豊かである。村人はこれによって漢族の嫁をもらえているという。これらの家庭の特徴は、第一世代と第二世代（嫁は含まない）は漢語青海方言とチベット語アムド方言の両方の言語ができるが、第三世代は漢語青海方言、または漢語普通話しかできない。「漢族のまま」残っている家庭は、地理的、親族との繋がりが強いほか、経済的にも2)の漢族よりは豊か²⁸であるという特徴がある。

上述したように、「チベット化」の程度によって、各グループの話せる言語と、母語として認識している言語に異なる点が見られ、その世代間における言語の使用状況は表12のようになる。表12の記号は表11と同様である。「+」は話せる言語を表し、「⊕」は母語を表す。「-」はその言語が話せないことを表す。

表12：カルマタン村の漢族家庭の各世代の言語使用

		チベット語アムド方言	漢語青海方言
1) 「チベット化」している	第一世代	+	⊕
	第二世代	⊕	-
	第三世代	⊕	-
2) ジャマウオ	第一世代	+	⊕
	第二世代 ²⁹	+	⊕
	第三世代	⊕	+
3) 漢族のまま	第一世代	+	⊕
	第二世代	+	⊕
	第三世代	-	⊕

²⁸ 調査当時、村人から「漢族の婚資が高いので、収入が多い家庭は漢族の嫁がもらえる」と語ってくれた。

²⁹ 第二世代の嫁はチベット族であり、漢語青海方言は話せない。

3.4 王徳有家の事例

3.4.1 王徳有家の基本データ

王徳有の家庭は、もともとはゲラの「ヨンズ・ジャ」の子孫であり、王徳有は漢民族であることを明確に意識している。村内でも「純漢族」の家庭として認められている表 11 の 3) 「漢族のまま」に属するが、その妻王米姐は「ジャマウォ」を自称し、自ら単純な漢族ではないという。その一方で、長男は漢族という民族意識を持っており、父の影響が強いといえよう。

表 13 に王徳有の家庭における基本状況を記しておく。調査対象の年齢と学歴の格差があまりにも大きいため、読む能力の調査には二つの文献資料を用いた。一つは、『0～6 歳児童養育手冊』という康楊鎮衛生局が各村に配布している漢語とチベット語との二言語対照本である。この本は挿画と短い文章から成り立っており、チベット族の女性とその家庭に適した図書であるという記載がある。もう一つは、調査地の村人が殆ど読まない「人民日報」という新聞である。調査地では、新聞は政府機関には置かれているのをしばしば見かけるが、村内ではめったに見かけない。そのため、調査地の新聞の読者は政府機関に働いている公務員、または町に暮らしている知識人に限られていると言えよう。「人民日報」にはチベット語版がないため、中国語版しか用いていない。

この読む能力について、小学校の学歴を持っている調査対象者には『0～6 歳児童養育手冊』の「重視保護眼睛」(写真 1、2)を読んでもらい、中学校またはその以上の学歴を持っている調査対象者には『人民日報』の「天然気,缺口有多大」(写真 3)を読んでもらった。

書く能力については、①名前程度しか書けない、②自己紹介が少し書ける、③よく書けるという 3 種に分け、この三つを基準にして書く能力を判断した。調査対象者の個人情報保護のため、ここに書いた文書は載せていない。

表13：王徳有家の基本データ

	年齢	戸籍上の民族	最終学歴と就学状況	読み書きできる言語	話せる言語	宗教
王徳有	72歳	漢族	チベット族小学校 ³⁰	チベット語	チベット語アムド方言 漢語青海方言 漢語普通話	チベット仏教
夫人	69歳	漢族	未就学	無	チベット語アムド方言 漢語青海方言	チベット仏教
長男	37歳	漢族	チベット族中学校 三年生	漢語 チベット語	チベット語アムド方言 漢語青海方言 漢語普通話	チベット仏教
嫁	38歳	漢族	未就学	無	漢語青海方言	チベット仏教
長女	16歳	漢族	回族中学校一年生	漢語	漢語青海方言 漢語普通話	チベット仏教
次女	13歳	漢族	回族小学校六年生	漢語	漢語青海方言 漢語普通話	チベット仏教
三女	9歳	漢族	回族小学校三年生	漢語	漢語青海方言 漢語普通話	チベット仏教

出典：2016年8月と9月の聞き取り調査を基に筆者が作成

³⁰ 本論文では各学校の名をチベット族小学校、チベット族中学校、回族小学校、回族中学校、普通学校のように書いてある。チベット族小学校とチベット族中学校は主にチベット語を教授言語としてバイリンガル教育を行っている学校のことであり、調査地では「民族学校」とも呼ぶ。回族小学校と回族中学校は回族の集中度が高い地域であるため、回族学校と名付けられているだけであり、教授言語は漢語普通話である。普通学校は漢語普通話で教育をしている学校のことである

写真1：チベット語の文章

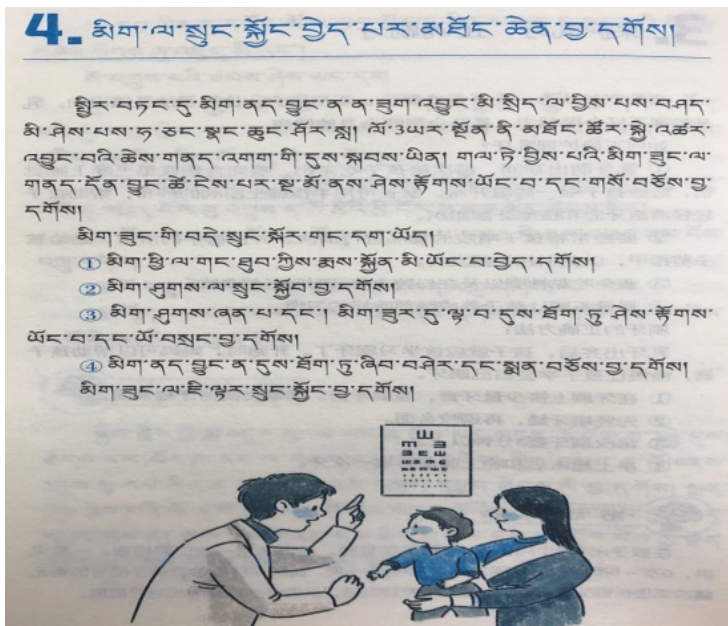
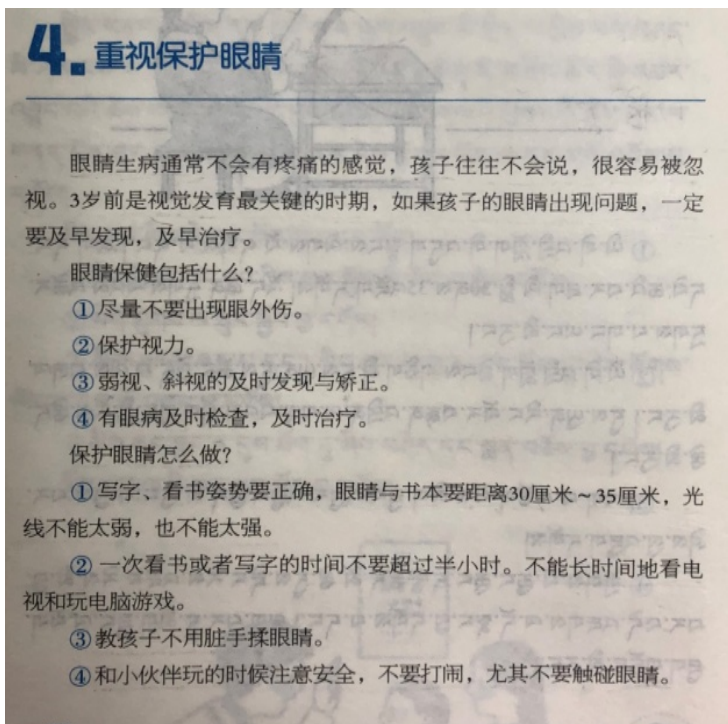


写真2：漢語の文章



出典：中華全国婦女聯合会（2018）『0～6 歳兒童養育手冊』
中国婦女出版社.（2018：チベット語 P48、漢語 P50）

写真3：漢語の新聞



出典：人民日報 2014年3月31日 星期一

以下、王徳有の家族全員の言語使用について、聞き取り調査で得た情報に従いとめる。

(1)王徳有

王徳有の母語は漢語青海方言である。両親とも漢族であり、家庭内の言語は漢語青海方言であった。チベット語アムド方言は小さい時から話せた。両親からチベット文字を学んだ方が良いと言われて村のチベット族小学校に通ったので、写真1のチベット語の文書は読めるが、組み立ての難しい単語だけは「ツックデル³¹」で読んだ。そして書けるのは村名と自分の名前ぐらいである。漢語の文書は全然読めない。

(2)夫人

同じ尖扎県に属するチベット族ガプク村の漢族家庭の出身である。しかし、夫人の母はチベット族であり、小さい時はチベット語と漢語の両方の名前を持っていた。漢族の家庭に嫁いってから漢語の名しか使っていない。

夫人の母語はチベット語アムド方言であり、漢語青海方言も小さい時から話せた。民族意識は「ジャマウオ」である。家庭内では息子の嫁と孫たちがチベット語アムド方言を話

³¹ 単語の組み立てを分から読みすること。

せないで、漢語青海方言で話しているが、家庭外ではチベット語アムド方言を使い、知らない人にもチベット語アムド方言で話す。

(3)長男

漢語青海方言もチベット語アムド方言も小さい時から話すことができる。母語は漢語青海方言である。家庭内の言語は漢語青海方言だったが、ある時から自分の話すことばがチベット語アムド方言になったという。民族小学校に通うようになってから、クラスメートからの影響と、また休みに村のチベット族の子供たちと家畜を山に放牧するので、チベット語アムド方言を使う時間が漢語青海方言より長かったのが原因という。

チベット族小学校は、家から通ったため、たまに家でもチベット語アムド方言を使うようになった。チベット族中学校時代は寄宿制学校なのでチベット語アムド方言を使い、漢語青海方言は普段使わなかった。チベット族中学校を卒業したあと、家でもチベット語アムド方言をよく使うようになった。漢語青海方言は家庭内と、同村の漢語青海方言を使い続けている親戚に対して使っている。

読み書きであるが、長男は写真3の漢語の新聞と写真1のチベット語の文書はすらすらと読んだ。そして、漢語もチベット語も少しは書けたが、書いたチベット語の文書が助詞と単語の組み立てが間違っており、チベット語より漢語の方が使い慣れているようであった。

(4)嫁

嫁は漢族の村出身であり、母語は漢語青海方言である。結婚当初、チベット語アムド方言は一言も話せないし聞き取りもできなかった。今、簡単な会話ならば聞き取れる。チベット族が相手の時も、青海方言で返事をしても相手は分かるため、チベット語アムド方言は話せなくても問題がない。

(5)孫たち

三姉妹は漢語青海方言を母語としている。チベット語アムド方言の使用について、孫(長女)と二人の妹の言語の能力に少し異なる点がある。孫(長女)は普段、漢語青海方言と漢語普通話を使い、チベット語アムド方言は全然使ったことがないという。孫の次女と三女は隣人のチベット族の子供とたまに遊ぶため、漢語普通話で通じない時はチベット語アムド方言の借用語を使って交流している。家庭内でも父に対してたまに漢語青海方言にチ

ベット語アムド方言の借用語を混ぜて話している。学校では漢語普通話を使っているのに、家庭外では漢語青海方言よりも漢語普通話を使うことが多い。

三姉妹の読み書きの能力については、長女は今高校生であり、大学の進学試験との兼ね合いから、対面調査を行うことはできなかった。次女は写真3の漢語の新聞が上手に読めるし、文書もよく書ける。三女はまだ小学生であるため、写真2の漢語の文書を読んでもらった。何箇所か読めない漢字があったり、書いた文書にも間違っている単語があったりしたが、書いた文書が一番長く、よく書けていた。

3.4.2 王徳有家の三世代の言語使用³²

王徳有家の三世代における言語使用状況をはっきりさせるため、家族全員に、家庭内は祖父母、両親と兄弟、子供、親戚、家庭外は友達、普通の人、知らない人に分けて、話し相手によってどの言語を用いるか聞き取り調査を行った。表14は第一世代である王徳有とその妻が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。表14の「A」は漢語青海方言、「B」はチベット語アムド方言、「C」は漢語普通話、「-」はその話しかける対象が存在しないことを表す。そして、このABCはよく使っている言語の順に並べてある（以下同様）。

³² 本論文の調査対象の言語能力は、対面調査を通じて筆者が判断した。筆者はチベット村の生まれであり、高校卒業までチベット民族学校に通った。筆者の母語はチベット語であり、チベット語の文書を読むことに不自由はない。漢語は小学校一年生から勉強し始め、話す、聞く、読む、書くに不自由はない。

表 14：王徳有家の第一世代の言語使用

話しかける対象		王徳有	夫人
家庭内	祖父・祖母 ³³	A	A B
	両親	A	B
	配偶者	A B	A B
	兄、姉	A	B
	弟、妹	—	B
	子供	A B	A B
	漢族のままの親族	A	A
	チベット化している親族	B	B
家庭外	チベット族の親友	B	B
	漢族の親友	—	—
	チベット族の普通の友達	B	B
	漢族の普通の友達	—	—
	康楊鎮町の店員	A B C	A B
	知らない人	A B	A B

王徳有の家庭内の共通言語は漢語青海方言である。夫人は祖父母と王徳有には漢語青海方言を使い、彼女の親族にはチベット語を良く使っていたという。それは、夫人が「ジャマウオ」であることと関係がある。王徳有夫妻に、どのように言語を使い分けるのか聞いたところ、「家庭外では互いにチベット語アムド方言で声をかける。それは、外に出るとみなチベット族だから。もし、他の人がおらず、二人だけであったら、漢語青海方言で声をかけるときもある」という。そのため、表 14 では、配偶者と子供の欄の B は斜体にしてある。王徳有はゲラの「ヨンズ・ジャ」の子孫として、カルマタン村に多くの親族がいる。そのなかには王徳有の家庭のように「漢族のまま」残っている家庭もあるし、「チベ

³³ 第一世代の祖父母と両親はすでに亡くなっているが、この表では王徳有夫妻の言語背景を明確にするため、祖父母と両親に対して使われた言語も表に入れてある。

ット化」している家庭も少なくない。そのため、王徳有が親族に、漢語青海方言とチベット語アムド方言両方とも使用することは予想できることである。そして、二人ともチベット族村出身なので、友達はチベット族である。友人には、漢語青海方言がわかる者でも、チベット語アムド方言を用いる。なお、王徳有は買い物するとき、漢語普通話も使用している。表 15 は、第二世代である長男と嫁が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。

表 15：王徳有家の第二世代の言語使用

話しかける対象		長男	嫁
家庭内	祖父・祖母	A	A
	両親	A	A
	配偶者	A	A
	兄、姉	A	A
	弟、妹	—	A
	子供	A	A
	漢族のままの親族	A	A
	チベット化している親族	B	A
家庭外	チベット族の親友	B	—
	漢族の親友	—	A
	チベット族の普通の友達	B	A
	漢族の普通の友達	A	A
	康楊鎮町の店員	A B C	A
	知らない人	A B	A

表 15 から、長男夫妻の家庭内の言語は漢語青海方言であることが分かる。前述したように長男はチベット語アムド方言と漢語青海方言のバイリンガルであるから表 14 の王徳有夫妻と同じように、親族には、漢語青海方言とチベット語アムド方言の両方を使用している。家庭外の言語使用を見ると、長男は話し相手によって言語を選択しているが、長男の夫人は漢語青海方言しか話せないという理由で、話し相手の民族を問わず全て漢語青海

方言を使用している。また、長男は出稼ぎ等で外に働きに行くため、漢族と回族の友達には漢語青海方言を使用している。そして、王徳有と同じように買い物の時には漢語普通話も使用している。

表 16 は、第三世代である三姉妹が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。

表 16 : 王徳有家の第三世代の言語使用

話しかける対象		孫 (長女)	孫 (次女 ³⁴)	孫 (三女)
家庭内	祖父母	A	A	A
	両親	A	A	A
	配偶者	-	-	-
	兄、姉	A	A	A
	弟、妹	A	A	-
	漢族のままの親族	A	A	A
	チベット化している親族	A	A	A
家庭外	チベット族の親友	-	A	A
	漢族の親友	A C	A	C
	チベット族の普通の友達	-	-	-
	漢族の普通の友達	A C	A	C
	康楊鎮町の店員	C	C	C
	知らない人	A C	A C	A C

三姉妹も家庭内では漢語青海方言を使っている。次女と三女は話し相手によって漢語青海方言にチベット語アムド方言の借用語を混ぜて使うときもある。それは隣人のチベット族の子供とよく遊ぶので、流暢ではないもののチベット語アムド方言が少し分かるため、たまに祖父母と父親にも漢語青海方言にチベット語アムド方言の借用語を混ぜて話すこ

³⁴ 次女も三女もチベット語アムド方言はわずかな語彙しか知らないため、表 3-7 にはチベット語アムド方言は入れていない。

とがある。家庭外の言語使用は、孫は3人とも話し相手によって言語の選択をしている。長女は親友と友達に漢語青海方言と漢語普通話というところが若干異なるが、チベット族の友達がいなため、チベット語アムド方言は聞き取れるぐらいで話せない。次女と三女は片言のチベット語アムド方言が話せる。三姉妹の学校選択について、「孫を村の小学校に入れようとしたが、チベット語アムド方言が全然聞き取れないという理由で、学校から入学を断られた」と王徳有の夫人が話してくれたことがある。次女と三女の学校内での言語使用は、「楊家」の回族小学校に通っているため、教室内では漢語普通話、外では漢語青海方言という。これは、中国全土において普通学校での教授用語は漢語普通話に決められているからである。康楊鎮の店員に対しては、孫3人とも漢語普通話を使用し、知らない人に対して漢語青海方言か漢語普通話を使っている。

3.4.3 考察

第一世代の王徳有は母語の漢語青海方言の他に、チベット語アムド方言、他にも漢語普通話も使う。彼の妻の母語はチベット語アムド方言であり、他に漢語青海方言が話せる。第二世代の長男の母語は漢語青海方言であり、チベット族の村出身のうえ民族学校に通ったことがあるのでチベット語アムド方言、漢語普通話に堪能である。嫁は漢族村の出身なので、漢語青海方言しか話せない。第三世代の三姉妹は前述のように、家庭内では漢語青海方言の使用頻度が高いが、家庭外では漢語普通話を頻繁に使っている。

この三世代の母語と言語能力は表17のようになる。表12と同様に「+」は話せる言語を表し、「⊕」は母語を表す。「-」その言語が話せないことを表す。ここでの「話せる」というのはコミュニケーションを取れることを表す。

表17：王徳有家の三世代の言語能力

	チベット語アムド方言	漢語青海方言	漢語普通話
王徳有	+	⊕	+
夫人	⊕	+	-
長男	+	⊕	+
嫁	-	⊕	-
孫	-	⊕	+

王徳特有と長男の母語は漢語青海方言であるが、チベット語も話せるほか、二人とも民族学校に通ったことがあるため、チベット語の読み書きもできる。世代によって言語能力に差がある原因として考えられるのは以下のようなことである。

第一世代の王徳有夫婦はチベット村出身である。二人とも 1959 年の青海省チベット地域の民主改革を体験し、人民公社・生産隊時代、チベット族と共同で集団労働に従事していたため、チベット語アムド方言を流暢に話することができる。第二世代の長男は人民公社・生産隊の時代が終わった後の伝統回帰の時代に生まれた。彼は子供時代に放牧を通じて行なったチベット族との交流と、民族中学校での教育を受けた経験により、漢語青海方言よりもチベット語を主として用いる。しかし、漢族村出身の嫁はチベット族との交流を持たなかったため、漢語青海方言を主として用いる。第三世代の三姉妹は、市場経済の浸透とともに学校教育とテレビの普及で漢語普通話が話せるようになった。

各世代の言語使用を、使用頻度の高い順に書くと表 18 のようになる。

表 18：王徳有家の各世代の言語使用の優先度

第一世代	王徳有	家庭内	漢語青海方言＞チベット語アムド方言
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語青海方言＞漢語普通話
	夫人	家庭内	漢語青海方言＞チベット語アムド方言
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語青海方言
第二世代	長男	家庭内	漢語青海方言＞チベット語アムド方言
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語青海方言＞漢語普通話
	嫁	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語青海方言
第三世代	孫（長女）	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語普通話＞漢語青海方言
	孫（次女・三女）	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語普通話＞漢語青海方言

表 18 から分かるように、王徳有家の第一世代と第二世代は言語の優先度から見ると、チベット語アムド方言＞漢語青海方言＞漢語普通話の順番である。しかし、第三世代はそ

の逆になり、チベット語アムド方言の使用率はほぼゼロに近い。また、漢語普通話の使用率も第一世代と第二世代より高くなる傾向がある。それは、漢語普通話が教授用語となる学校教育が原因であることはいうまでもなく、学年が高くなるとともに、漢語普通話の使用率が漢語青海方言より高くなることを示している。

しかし、チベット語を使う環境が整っているのに、家庭内の言語はなぜ今チベット語アムド方言ではなく、漢語青海方言なのであろうか。王徳有は「息子の嫁は化隆出身で、チベット語ができない。だから、家ではみんな漢語青海方言を使うようになった」と、目下のものであっても言語を新来の人物にあわせることになった理由をこう述べている。

王徳有家庭の各世代の言語背景で述べたように、各世代によって他の村人との接触状況は異なって来ている。特に、近年人口増加が激しく、600人以上有する村として、以前のように村人全員知り合いではなくなっている。「カルマタン村ほど外へ働きに行っている村は見たこともない」と言われるように、カルマタン村は町に近いため、大人はほぼ毎日外へ働きに行っている。残りの子供は留守番として一日中テレビを見ているのが普通である。つまり、若い世代は家庭外で村人と接触する機会がほかの第一世代と第二世代より少なくなる傾向がある。

一方 2000 年以降嫁いできた漢族の嫁が積極的に村の共通語であるチベット語アムド方言を学ばない原因としては、漢語青海方言あるいは漢語普通話を使える村人が増えたという言語背景も考えなければならない。

3.5 まとめ

第一世代の王徳有自身の母語は漢語青海方言であり、そのほかチベット語アムド方言も話せる。それに加え、漢語青海方言とチベット語アムド方言の両言語が話せる外来者の夫人（第一世代）の加入により、第二世代の長男も漢語青海方言とチベット語アムド方言とが流暢に話せる。それは、長男が民族中学校に通っていた時、家庭内の言語が一時的にチベット語アムド方言に変わったという過去からも確認できる。そして、漢語青海方言しか話せない外来者の嫁（第二世代）の加入により、家庭内の言語がもう一度漢語青海方言に戻り、第三世代の母語も漢語青海方言となっている。第三世代は回族の学校に通っているため、漢語普通話も流暢に話せ、家庭外でも漢語普通話をよく使っている。

第4章 チベット族家庭の言語使用状況³⁵

³⁵ 第4章は周楊措（2019b）を基に書いたものである。

本章では、カルマタン村のチベット族家庭の言語使用状況を考察するため、婿入婚の婿が漢族であるツイラン家庭を事例として取り上げ、以下の二つの点を明らかにする。第一は、ツイラン家庭の各世代の言語使用状況と家庭内の言語状況がどうなっているのかを明らかにすることである。第二は婿入り婚の婿が漢語話者であるときどうなるかを見る。第3章の漢族家庭である王徳有家を調査したとき、漢語の単一言語話者である嫁によって、次世代の言語も漢語の単一言語になる傾向が見られた。本章ではツイラン家庭の事例を通して、漢族の婿が家庭内の言語に影響を与えるかどうかを明らかにすることを目的とする。

4.1節では、チベット族の移住家庭を述べる。4.2節では、チベット族家庭の言語使用を述べる。4.3節では、チベット族家庭の婚姻関係を中心にチベット族家庭の特徴を述べる。4.4節では、婿が漢族であるツイラン家のその基本データ、家族それぞれの言語能力と日常の言語使用について述べる。4.5節では、本章で論じたことをまとめる。

4.1 チベット族の移住過程

カルマタン村に移住してきた最初のチベット族の家庭は、ジョンジョン・ヤカ³⁶であり、800年前化隆県のヒジャン村から移住してきた。その当時のカルマタン村は誰も住んでいない野原であり、近隣の楊家（ジャコル）に暮らす「王」という姓の回族と同じツォワとして友好的な関係を保っていた³⁷。ツォワ（tsho ba）は、「部落・集落」を意味する。

その十年後にはジョンジョン・マカが化隆県のラクマン村から移住して来て、さらにその後ホンツァンが移住してきた。ホンツァンがどこから来たのかは不明である。この3つの家族を中心に拡大し、今では五つのツォワがある。元村長のN氏（70代 男）は、「小さいときカルマタン村には27世帯しかなかった」と言い、多くの世帯は生産隊が組織されてから移住してきたという。また、今の各ツォワの世帯数について、「ホンツァンは5世

³⁶ 第3章の3.1節を参照。

³⁷ ジョンジョン・ヤカの子孫であるD氏（60代）は、曾祖父母の話として、昔、「王」ツォワの葬式の手伝いに行ったとき、ジョンジョン・ヤカの女性は料理の手伝いをし、男性は回族の白い回族の帽子をかぶって、「王」ツォワの男たちと一緒にモスクに入ってお祈りをしたという。同様に、ジョンジョン・ヤカの葬式の時、楊家「王」ツォワの回族が手伝いに来て、料理の手伝いのほか、宗教活動もチベット族の習慣に従ったという。

帯、ジョンジョン・ヤカツァンは7世帯、ジョンジョン・マカツァンは17世帯、ラカツァン（ラカは高いところの意味）は26世帯、固有名がない14世帯、その他はツォワに属していないので、親族間で助け合いをしている」と語っている。

4.2 チベット族家庭の言語使用

カルマタン村では、チベット語アムド方言、漢語青海方言、漢語普通話といった3つの言語が話され、話し相手によって用いる言語を自由に切り替える村人もいる。チベット語アムド方言と言っても、話者によって漢語が混ざっているのもあれば、そうでないものもある。というのは、カルマタン村はチベット族と漢族が雑居している村であるため、調査地のチベット語には多くの漢語青海方言の借用語が浸透している。しかし、近年、寺院や民族学校などが民族語の美しさを守ろうと漢語からの借用語の不使用を提唱しているため、漢語青海方言あるいは漢語普通話の借用語を意識的に使わないようしている人も少なからずいる³⁸。したがって、この村のチベット族が家庭内でどの言語を使い、その言語を使

³⁸ アムド地方では特定の標準語は正式に決められていないが、テレビなど地元のメディアや高等学校では牧畜地帯方言、または半農半牧地帯方言を標準語として使う傾向がある。南嘉才讓（1997: 66）はアムド地方では、半農半牧方言であるラプラン方言（甘肅境内）と同仁方言（青海境内）を標準語にしていると述べ、その使用範囲として地元メディア、高等学校、出版会社を挙げていた。

地元メディアを代表するアムドテレビ（*Ch.安多衛視*、*Tib. a mdo brnyan 'phrin*）は1984年から放送し始め、視聴者は青海省および甘肅省、四川省のチベット語アムド方言話者である。このテレビは当初一日30分のチベット語のニュース放送であったが、2006年に青海衛視から完全に独立したチャンネルを持っている。そして、今ではチベット語のニュースや天気予報など7種類以上の番組を有し、お正月には地元のチベット族の監督が作ったチベット語のテレビドラマまで放送している。このアムドテレビがチベット語アムド方言のどの下位方言を主体に放送しているのかを、ニュース監督とニュースキャスターの出身地や用いる方言から考察しておく。以下の表はアムドテレビのニュース監督とニュースキャスターの基本データである。

アムドテレビのニュース監督とニュースキャスターの基本データ

	名前	出身地	母語（方言）
ニュース監督	洛加才讓	青海省海南州共和県	農耕地帯方言
ニュース副監督	索南多杰	青海省海南州貴南県	農耕地帯方言
	航知才讓	青海省海南州尖扎県	農耕地帯方言
男性ニュースキャスター	彭毛多杰	青海省海南州共和県	牧畜地帯方言
	才航太	青海省海南州貴南県	牧畜地帯方言
	才讓本	青海省海南州尖扎県	牧畜地帯方言
女性ニュースキャスター	才讓拉毛	青海省海南州貴徳県	半農半牧地帯方言
	華姐措	青海省海南州貴徳県	半農半牧地帯方言
	来忠	青海省海南州同徳県	半農半牧地帯方言
	拉毛友	青海省海南州貴徳県	半農半牧地帯方言

出典：「<http://www.qhtb.cn/about/boyinyuan/>」を基に筆者が作成（2018.8）

（個々人の用いる方言はアムドテレビのC氏による）

表から分かるように、ニュース監督の3人が農耕地帯方言話者であり、ニュースキャスター7人のうち、牧畜地帯方言話者は3人、半農半牧地帯方言話者は4人である。この事実から、アムドテレビのニュースで使われているチベット語は半農半牧地帯方言、または牧畜方言が主体になっていることが分かる。

アムドテレビで20年間ニュースの翻訳に従事しているC氏（50代、女）は「ニュースキャスターが使っているチベット語は牧畜地帯方言でもない。農耕地帯方言でもない。その真ん中の半農半牧地帯方言を使っている」と語っている。気象局で働いた経験があるR氏（30代、男）も「アムドテレビでは、牧畜方言を主にし、半農半牧の方言も使っている」と話し、天気予報のアナウンサーの方言選択について、「気象局のアナウンサーは牧民出身の人が多く、彼らは牧畜方言を使う。農民出身のアナウンサーは

うときその言語を使っているという意識があるのかをはっきりさせるため、65世帯のチベット族にアンケート調査を行うとともに、それを基にして口頭調査も行った。その際、筆者は調査対象に機械的に「日常家庭内で使っているチベット語のなかに、漢語が混ざっていますか」と質問した。回答結果は、表19のようになる。

表19：カルマタン村のチベット族の家庭内の言語使用

チベット語のなかに漢語が混ざっていない	チベット語のなかに漢語が混ざっている
33世帯	32世帯

表19から分かるように、ほぼ5割のチベット族が家庭内で漢語が混ざっていないチベット語アムド方言を使っていると述べている。彼らにこの選択の理由について聞いたところ、10世帯は「漢語青海方言・漢語普通話是一言も喋れない」、5世帯は「漢語を混ぜないように意識している」、残りの18世帯は「我々が使っているチベット語は村のチベット語だ」と言っている。漢語が混ざっていようと村のなかではチベット語と認識されているので、漢語の借用語が多かろうが少なかろうが、自らが使う言語は「チベット語」と感じているらしい。

一方、漢語が混ざっていると答えたのは32世帯である。そのなかの25世帯はいつも使うチベット語には漢語が混ざっており、漢語混じりのチベット語を使わないと会話が通じなくなると述べている。残りの7世帯は、話し相手によってチベット語アムド方言か、漢語混じりのチベット語アムド方言のどちらかを用いると述べている。たとえば、民族中学校に通っている子供が話すチベット語には漢語が混ざっていないため、それに合わせてチベット語に漢語が入らないように意識することもあれば、学校教育を受けたことがない家族に通じるように漢語混じりのチベット語を使うこともある。

とすれば、5割のチベット族の家庭は家庭内で使っているチベット語に漢語は混ざっていないと言っているが、実際に意識して使っていない家庭は僅か5世帯だけであり、他の28世帯は漢語混じりのチベット語を使っていることになる。一方、家庭内で使っているチベット語に漢語が混ざっているという32世帯の内、7世帯は話し相手によって言

牧畜方言を真似し、半農半牧方言のような発音で放送している」と語っている。また、海老原（2019：3）も「牧畜方言はチベット文語と近いため、農区方言と比べて威信が高い」と述べている。

語を切り替えると言っているが、学校に通っている子は小学校4年生から高校卒業まで寄宿制生活の学校教育を受けており、家には休みの日にしか帰ってこない。そのため、日常家庭内で使っているチベット語には漢語が混ざっていると理解して良いだろう。つまり、カルマタン村のチベット族の家庭内では、漢語青海方言が混ざっていないチベット語を使っていると言えそうなのは5世帯だけであり、60世帯は漢語青海方言混じりのチベット語を使っていることになるであろう。

4.3 チベット族家庭の特徴

カルマタン村の182世帯のうち漢族の家庭は29世帯である。そのうち家庭内で使われている言語が完全にチベット語アムド方言になっている家庭が11世帯ある。一方、カルマタン村のチベット族の家庭は同村の漢族の家庭ほど言語に大きな変化は見られないため、ここでは、村全体の婚姻関係を中心にチベット族家庭の特徴を述べておく。

カルマタン村のチベット族家庭は、通常、同じチベット族と結婚するが、漢族との婚姻も少なからずある。しかし、この族際結婚の家庭はいずれも漢族の婿入婚であり、漢族の嫁入婚の事例は未だない。カルマタン村のチベット族家庭の特徴は、三つのタイプに分けられる。

タイプ1：チベット族同士の婚姻

タイプ2：チベット族の女が漢族家庭への嫁入り

タイプ3：漢族の男がチベット族家庭への婿入り

カルマタン村の約140世帯がタイプ1に属する。嫁と婿は主に尖扎県内及び、隣県の農耕地帯出身のチベット族であり、母語はチベット語アムド方言である。漢族の男とチベット族の女が結婚している家庭は10世帯しかない。そのうちの6世帯はタイプ2の家庭であり、娘を漢族の家庭に嫁がせているため、家庭内の言語に変更はない。残りの4世帯はタイプ3に属する。タイプ3は、漢族の婿は一般に長期間出稼ぎに行き、カルマタン村にはお正月など特別な事情がないかぎり戻って来ない。タイプ2及びタイプ3の特徴は、娘が出稼ぎに行ったとき漢族と知り合っ、自由恋愛をし、そこで結婚決めたというものである。多くの場合、チベット族の家庭は族際結婚に反対するが、少数なが

ら積極的に受入れる家庭もある³⁹。

4.4 ツィラン家の事例

4.4.1 ツィラン家の基本データ

ツィラン家の家庭内の言語は4.2節でみたチベット語に漢語を混ぜて使っている、婚姻のタイプとしてはタイプ3に属する家庭である。表20はツィラン家の基本状況である。表20の「読み書きのできる言語」は、第3章の王徳有家庭と同じ調査方法を用いている。

表20：ツィラン家の基本データ

	年齢	戸籍上の 民族	最終学歴と就学 状況	読み書きの できる言語	話せる言葉	宗教
ツィラン	54歳	チベット族	チベット族小学 校一年生	チベット語	チベット語アムド方言 漢語青海方言 漢語普通話	チベット仏教
夫人	52歳	チベット族	未就学	無	チベット語アムド方言	チベット仏教
長女	31歳	チベット族	チベット族中学 校一年生	チベット語 漢語	チベット語アムド方言 漢語青海方言 漢語普通話	チベット仏教
婿	33歳	漢族	普通中学校三年 生	漢語	漢語青海方言 漢語普通話 チベット語アムド方言	チベット仏教
孫	7歳	チベット族	チベット族小学 校一年生	チベット語 漢語	チベット語アムド方言 漢語普通話	チベット仏教

出典：2016年8、9月に行ったアンケート調査と2017年8月に行った対面調査を基に筆者
が作成

³⁹ 積極的に漢族の家庭へ娘を嫁がせた家庭は、嫁入り先からの礼金目当てだという噂も聞いた。

以下、ツイランの家族全員の言語使用について、聞き取り調査で得た情報に従いまとめる。

(1) ツイラン

ツイランの母語はチベット語アムド方言である。両親ともチベット族であり、家庭内の言語もチベット語アムド方言である。漢語青海方言は、小さい時から片言話せる。村の小学校で一年間勉強したため、チベット語アムド方言は読み書きもできる。しかし、ツイランが学生だった時、小学校一年生レベルに漢語教育は行われていなかったため、漢語の読み書きは全然できない。チベット語の読み書き能力について、ツイランは第3章の写真1のチベット語の文書を「ツックデル⁴⁰」をすれば読めるが、書くことに関しては自分の名前しか書けない。

(2) 夫人

夫人はチベット族であっても、回族の名前を持っている⁴¹。その理由は夫人が生まれる前、夫人の両親のもとに生まれた子供がすぐに亡くなったため、夫人には健康を祈って普通ではない名前を付けたことによる。夫人の両親はチベット族であり、母語はチベット語アムド方言である。漢語は話せない。

(3) 長女

チベット語アムド方言が母語であり、結婚を機に青海方言を話せるようになった。民族中学校で学習したことがあり、中学校一年生のとき、学習したくないという理由で退

⁴⁰ 注31を参照。

⁴¹ カルマタン村の村人は少し変わった名前を付ける習慣を持っている。これは黄河沿いに居住する農村部では普遍的な現象でもある。カルマタン村では、数字の漢語読みを名前とする人が多い。それは民族に関わらず使われている。例えば、四十九、五十八、六十五など、漢数字の名前を持っている人は今の40代から70代の人である。戸籍登録のとき、両親あるいはそれに代わる者が、チベット語アムド方言の発音に当てはまる漢語が書けないため生年を名前としたもの、あるいは書けてもあえて漢族の伝統、あるいはその影響によって、生年または家庭内の老人の歳、父母の歳を足して名前としたものである。これは、「病気になるないように」という願いで付けられた名前とも言われている。

学した。学校教育を受けたことがあるため、漢語普通話は少し話せる。

読み書き能力について、長女は第3章の写真1のチベット語はすらすら読めるが、第3章の写真2の漢語の文書に読めない漢字があった。チベット語も漢語も少し書けるが、二つの言語の書く能力に差異は見られない。

(4)婿

青海省のクンブム寺（タール寺）がある湟中県出身の漢族である。普通中学校の初中までの学歴を有し、母語である漢語青海方言のほか、漢語普通話も上手である。チベット語アムド方言は、出稼ぎ場所の「果洛」で身につけ、日常会話が理解できる程度である。お正月のような特別の事情があるときカルマタン村に戻って来るだけである。長女とは出稼ぎの場で知り合い結婚した。

読み書き能力について、婿は第3章の写真3の漢語の新聞がすらすら読めたが、漢語の文書は少ししか書けない。

(5)孫

孫は一人だけであり、小さい時から祖父母と生活しているため、チベット語アムド方言を母語にし、漢語青海方言は全然できない。普段、漢語のアニメを見るのが好きで、このアニメの影響で漢語普通話も少し話せるようになっている。お正月にだけ父の実家である湟中県にも行っているが、父側の家族とは漢語普通話で会話をする。

読み書き能力について、孫は写真1、2のチベット語と漢語の文書が読めたが、漢語の方が上手である。漢語とチベット語が少しだけ書けた。

4.4.2 ツィラン家の三世代の言語使用

ツィラン家の三世代における言語使用状況を明確にするため、家族全員に、家庭内は祖父母、両親と兄弟、親戚、そして家庭外は友達、普通の人、知らない人に分け、話し相手によってどの言語を用いるのか、聞き取り調査を行った。

表21は第一世代であるツィランとその夫人が、家庭内と家庭外の人にどの言語を用いるのかを整理したものである。表21の「A」は漢語青海方言、「B」はチベット語アムド方言、「C」は漢語普通話、「-」はその話しかける対象が存在しないことを表す。そして、このABCはよく使っている言語の順に並べてある（以下同様）。

表 21：ツイラン家の第一世代の言語使用

話しかける対象		ツイラン	夫人
家庭内	祖父母 ⁴²	B	B
	両親 ⁴³	B	B
	配偶者	B	B
	兄、姉	B	B
	弟、妹	B	B
	親族	B	B
家庭外	チベット族の親友	B	B
	漢族の親友 ⁴⁴	—	—
	チベット族の普通の友達	B	B
	漢族の普通の友達	A B	B
	康楊鎮の商店の店員	A B	B
	知らない人	B	B

ツイランの家庭内の共通言語はチベット語アムド方言である。ここで注目したいことは、ツイラン夫妻が婿に使用する言語についてである。ツイランは「うちの婿はご飯を食べる、お茶を飲むなどの日常用語は聞き取れる」と語り、婿にはチベット語アムド方言で話し、婿は漢語青海方言で返事するという。

ツイランは家庭外でも、基本的にチベット語アムド方言を使っている。ただし、漢族の普通の友達と康楊鎮の商店の店員には漢語青海方言を使っている。ツイラン家は一年前から村の中心で売店の経営をはじめ、商品を仕入れるため康楊鎮の市場へよく行くよ

⁴² 第一世代の祖父母はすでに亡くなっているが、ツイラン夫妻の言語背景を明確するために、祖父母に対して使われた言語も表に入れてある。

⁴³ 父は70代であり、母は5年前に亡くなった。

⁴⁴ 筆者が「隣居の漢族とは普段どの言語で話している」と聞いたところ、「村の漢族はチベット語がペラペラだから、もう漢族ではない」とツイランが語り、隣居の漢族について「漢族」という意識は持っていない。

うになっている。表 21 の漢族の普通の友達とは、商品のやりとりで知り合った漢族のことであり、彼らには主に漢語青海方言を使い、簡単なチベット語アムド方言が聞き取れる漢族の友達にはチベット語アムド方言も使っている。一方、夫人は漢語が一言も話せないため、家庭外でもチベット語アムド方言しか使っていない。

表 22 は、第二世代である長女と婿が家庭内と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。

表 22：ツィラン家の第二世代の言語使用

話しかける対象		長女	婿
家庭内	祖父母	B	— ⁴⁵
	両親	B	A B
	配偶者	B A	A B
	兄、姉	—	—
	弟、妹	B	C
	親族	B	A ⁴⁶
家庭外	チベット族の親友	B	A B C
	漢族の親友	—	A
	チベット族の普通の友達	B	A B C
	漢族の普通の友達	B	A C
	康楊鎮の商店の店員	B A C	A C
	知らない人	B C	C

長女は家庭内では、主にチベット語アムド方言を使っている。しかし、漢族である夫（婿）には主に漢語青海方言を使っている。一方、婿は、義理の両親と妻（長女）には主に漢語青海方言を使うが、時にはチベット語アムド方言も使っている。妻の弟は大学の学歴を持ち、漢語普通話も話せるので、弟には漢語普通話を使っている。そして、親

⁴⁵ ツィランの父親は兄弟の家族と一緒に住んでいるため、長女の夫（婿）は普段祖父とほとんど話をしておらず、考察の対象にしていない。

⁴⁶ ツィラン家側の親族である。

族には漢語青海方言しか使っていない⁴⁷。

長女は家庭外でも、主にチベット語アムド方言を使っている。康楊鎮の商店の店員や知らない人にチベット語アムド方言が通じなかった場合には、漢語青海方言または漢語普通話を使う。一方、婿は、基本的には漢族青海方言を使っている。チベット族の親友や友達が彼（婿）のチベット語アムド方言が聞き取れなかった場合、漢語青海方言または漢語普通話に切り替えており、外省（青海省以外の省）出身の漢族の友達には漢語普通話を使っている。

表 23 は第三世代であるツイランの孫が家庭内と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。

⁴⁷ 婿は親戚になぜ漢語青海方言だけを使うのかについて、その理由は詳細に聞けなかった。しかし、ある漢族家庭の嫁が筆者の質問に、家庭外では使っていないというチベット語で回答してくれた。その理由として、「私のチベット語は発音がきれいじゃないので、皆に笑われる」と語ってくれた。ツイラン家の婿も同じような状況ではないかと思われる。

表 23 : ツィラン家の第三世代の言語使用⁴⁸

話しかける対象		孫
家庭内	祖父母	B
	両親	B C
	配偶者	—
	兄、姉	—
	弟、妹	—
	親族	B
家庭外	チベット族の親友	B
	漢族の親友 ⁴⁹	—
	チベット族の普通の友達	B
	漢族の普通の友達	—
	康楊鎮の商店の店員	B C
	知らない人	B

孫は家庭内で祖父母と母にはチベット語アムド方言を使い、父にはチベット語アムド方言のほかに漢語普通話も使っている。そして、家庭外でも、孫は基本的にチベット語アムド方言を使っており、康楊鎮の商店の店員にはチベット語アムド方言で話かけ、言語が通じない時には漢語普通話を使っている。

4.4.3 考察

ツィラン家の各世代の母語と言語能力は表 24 のようになる。「+」は話せる言語を表し、「-」は話せない言語を表し、「⊕」は母語を表す。ここでの「話せる」というのはコ

⁴⁸ 孫は年齢的に小さいため、筆者の何回にもわたる聞き取りに明確に答えられず、回答には祖父の助言が加味されている。

⁴⁹ 普段から隣人のチベット化した同世代の漢族と遊んでいるが、この漢族の年少者も自己認識としては「チベット族」という意識を持っている。

コミュニケーションを取れることを表す。

表 24：ツィラン家の三世代の言語能力

	チベット語アムド方言	漢語青海方言	漢語普通話
ツィラン	⊕	+	-
夫人	⊕	-	-
長女	⊕	+	+
婿	+	⊕	+
孫	⊕	-	+

婿以外の家族全員の母語がチベット語アムド方言であり、婿だけの母語が漢語青海方言である。漢語青海方言に関しては、第一世代のツィランと第二世代の長女は漢語青海方言をある程度話せるが、夫人と孫は漢語青海方言が全然話せない。そして、漢語普通話に関しては、第一世代のツィランは学校教育を受けたことがあるが、当時の小学校レベルでは漢語普通話の授業が設けていないので、漢語普通話が話せない。第二世代の長女とその夫（婿）は九年義務教育を受けたことがあるので、二人とも漢語普通話が話せる。しかし、通った学校が民族学校と普通学校のように異なるので漢語普通話の水準にも差異がある。婿の漢語普通話は堪能であるが、長女は少し話せる程度である。そして、第三世代は7歳の若年であっても、民族小学校で漢語普通話を学んでいるほか、普段漢語普通話のアニメを見ているので、漢語普通話が少し話せる。

各世代の言語使用を、使用頻度の高い順に書くと表 25 のようになる。

表 25：ツイラン家の各世代の言語使用の優先度

第一世代	ツイラン	家庭内	チベット語アムド方言
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語青海方言
	夫人	家庭内	チベット語アムド方言
		家庭外	チベット語アムド方言
第二世代	長女	家庭内	チベット語アムド方言＞漢語青海方言
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語青海方言＞漢語普通話
	婿	家庭内	漢語青海方言＞漢語普通話＞チベット語アムド方言
		家庭外	漢語普通話＞漢語青海方言＞チベット語アムド方言
第三世代	孫	家庭内	チベット語アムド方言＞漢語普通話
		家庭外	チベット語アムド方言＞漢語普通話

婿を除くと、ツイラン家における各世代の言語の優先度は、チベット語アムド方言＞漢語青海方言＞漢語普通話の順である。一方、婿は漢語青海方言＞漢語普通話＞チベット語アムド方言の順である。また、第二世代から漢語普通話も使用しているが、これは第3章に述べた王徳有家の事例と同じように、学校教育によるものであり、すべての就学者に共通の事象である。第三世代からは漢語青海方言の使用が無くなっている。

要するに、ツイラン家の家庭内の言語はチベット語アムド方言が中心である。夫人以外はチベット語アムド方言のほかにも、漢語青海方言、または漢語普通話がある程度話せる。しかし、漢語青海方言が母語である婿に合わせようとはしていない。同じように、チベット語アムド方言が片言しかできない婿も母語がチベット語アムド方言である家族に合わせようとはしていない。

なぜ、互いに言語を合わせようとならないのであろうか。その原因として考えられるのは、カルマタン村で使われているチベット語アムド方言が牧畜地帯の方言とは区別される農耕地の下位方言であることが一因になっているであろう。この方言は漢語の借用語が多く使われており、単語さえ聞き取れたら、会話の内容も大体分かるのである。

そして、第三世代の孫が父である婿に言語を合わせない理由も、漢語青海方言を学ぶ環境が整っていないことが一番の原因である。父は普段家にいないため、漢語青海方言を話そうとしても相手がいらないわけである。

4.5 まとめ

ツィラン家は夫人を除いてチベット語アムド方言のほかに、漢語青海方言・漢語普通話がある程度使える。一方、婿も漢語青海方言と漢語普通話のほかに、チベット語アムド方言がある程度使える。しかし、家庭内の言語はチベット語アムド方言のままであり、漢語青海方言の切り替えは認められず、婿は家庭内の言語使用に影響を与えてはいない。

ツィランの家庭と第3章で述べた王徳有の家庭の事例を比較すると、第二世代が漢族（漢語話者）と結婚したという共通点がある。相違点のひとつは、嫁入りか婿入りかである。嫁というのは家事や子育てに欠けてはいけない存在として、家庭内で重要な役割を果たす。一方、婿というのは家計のために外へ出稼ぎに行っている時が多く、家庭内で特別な事情がないかぎり、嫁ほどの重要さはない。普段から家にいる嫁と普段から家にいない婿の違いが家庭内の言語選択に関与しているように見えるが、この二つの事例だけで外来者の嫁と婿の違いが家庭内の言語に影響を与えているということはできない。そもそも、王徳有家はもともと漢族だったため、漢語青海方言もチベット語アムド方言も自由に切り替えできる。だからこそ、漢語青海方言しか話せない嫁の加入により、家庭内の言語は意図的に漢語青海方言にしている。一方、ツィラン家はチベット族の家庭としてチベット語アムド方言が母語であり、漢語青海方言と漢語普通話の言語能力には限りがある。そのため、漢語青海方言及漢語普通話しかできない婿が入って来ても、ツィラン家が婿に言語を合わせるというのは難しい状況にあった。

第5章 回族家庭の言語使用状況

本章では、かつてカルマタン村の所有地であったグワタンに居住している回族の王敬民家を事例として取り上げ、チベット族と「雑居⁵⁰」している回族家庭の言語使用を明らかにする。

5.1 節では楊家東門村から一部の回族がカルマタン村の所有地であったグワタンへ移住して来たその過程を述べる。5.2 節では、回族家庭の特徴を述べる。5.3 節では、回族家庭の言語使用を述べる。5.4 節では、王敬民の家庭について、その基本データ、家族それぞれの言語能力と日常の言語使用について述べ、さらに、各世代の言語能力と言語使用について検討する。そして、5.5 節では、本章で論じたことをまとめる。

5.1 回族の移住過程

楊家東門村の村人がグワタンへ移住した年については、村人が「包産到戸⁵¹（各戸生産請負制）」が始まる二、三年前に楊家下庄の東門村から移住して来たと言っていることから、1980年ごろのことだと思われる。東門村の元村長の馬氏（80代 男 回族）によれば、現在東門村には160世帯があり、全て回族の家庭となる。村の総人口は620人。村内部は表26のように一社と二社、三社の3つに区分されている。

表 26：東門村の構造

	一社	二社	三社
世帯数	70 戸	62 戸	28 戸
人口	280 人	248 人	92 人
所在地	楊家下庄	楊家下庄	グワタン

出典：東門村の元村長馬氏とのインタビューを基に筆者が作成

東門村の村人がグワタンへ移住した過程について、三社の隊長H氏（50代 男 回族）は以下のように語っている。

⁵⁰ カルマタン村のホツァンと混住している状況にあるが、宗教が異なるため、民族間の交流はほとんどない。

⁵¹ 包産到戸（各戸生産請負制）は、1980年前後中国農村部で行われたものである。

東門村は昔から耕地が足りないため、人民公社・生産隊時代に3キロも離れているグワタン（カルマタン村の所有地である）に移住させた。当時、康鎮政府がグワタンに住宅を建て、東門村の村人に移住するように奨励した。しかし、移住したのは生活が困難な家庭だけであった。しかも移住に反対だった年配者は東門村に残り、移住したのは若い世代17戸であった⁵²。

グワタンはかつてグワ・ゴンパの所有地であったが、カルマタン村の村人 ZH 氏（40代 女 チベット族）、D 氏（50代 女 チベット族）、また東門村の元村長 M 氏（80代 男 回族）の話を総合すると、文化大革命の時に政府がグワタンを開墾し「農場」を設けたとのことである。

グワタンの名称については、調査地の民族と村によって微妙に異なる。グワタンに居住している回族はグワタン村と呼び、漢語では「各巴攤村」と書いている。しかし、上述のように今グワタンに居住している回族は東門村の村人であり、「グワタン村」と呼んだとしても、それが独立した「村」を指すわけではない。また、今グワタンに暮らしている回族の戸籍上の所属村は東門村である。他に、カルマタン村の村人はグワタンのことを、ホ

⁵² 移住には反対の意見があった。その理由について、東門村の元村長の馬氏は東門村からかなり遠いことが移住を拒んだ理由であると話してくれた。しかし、カルマタン村の ZH 氏（40代 女 チベット族）は「グワタンに住むと、チベット村の間（カルマタン村とアジョン村）に挟まれるから、回族たちが嫌がるのは当たり前でしょう。畑にも水を引かないといけないけど、カルマタン村とアジョン村に灌漑用水路がある。だから、グワタンに住むと畑にやる水もチベット村に頼まないと、農業すらできない。また、15年ほど前グワタンにモスクが立てられたが、毎朝煩くて、村の男たちが行って倒した」と言い、水問題や宗教上の問題があると語っている。その水問題について、グワタン村の隊長は「15年前、村内で「吸水ポンプ」を買って、近くの川から水を引いていた。しかし、それには電気代がかなりかかるため、去年からは畑をある「老板」に一畝あたり500元の値段で貸し出し、「老板」は畑に木を植え、その木を尖扎県の林業局に売って、そこから金を儲けている。人手が足りない時「老板」が村人を雇うので、一日100元の仕事代がもらえる」、このように語っている。

ツァンタン⁵³、ジャヒィタン⁵⁴などと呼んでいる。本論文では名称を統一するため、グワタンに居住している回族自身が呼んでいる「グワタン村」を使う。

5.2 回族家庭の言語使用

元村長が回族の婚姻について語るとき、「お互いの宗教が同じであれば、言語は何語を喋っても良い」と語っている。しかし、実際に村に入ってみると、多言語現象はあまり見られない。50歳以上の村人は漢語青海方言のほかに、チベット語アムド方言を人によっては流暢に話せる人、あるいは簡単な会話ができる人もいる。しかし、チベット語アムド方言を話せる村人はみな東門村で生まれた人である。他村から嫁してきた村人は漢語青海方言しか話せない。若い世代からは義務教育を受けているため、漢語青海方言も漢語普通話も話せる。

グワタン村の各家庭の家庭内における言語使用状況を調べたところ、28戸のなかでただ1戸だけが、漢語青海方言を主とし、チベット語アムド方言も使っていることが明らかになった。その家庭の戸主は化隆から嫁してきた「蔵回⁵⁵」であり、彼女の母語はチベット語アムド方言である。家庭内でもチベット語アムド方言を使っており、子供達はチベット語アムド方言を話すことはできないが、聞き取れるという。残りの27戸は家庭内で漢語青海方言だけを使っている。

5.3 回族家庭の特徴

グワタン村は隣村のカルマタン村に比べ、「空巢老人⁵⁶」と「留守児童⁵⁷」が多い。カル

⁵³ ホツァンとグワタンは接しているため、ラディとジョンジョンに居住している村人はホツァンとグワタンを一つと考える人もいる。そのため、グワタンのことをホツァンタンとも呼ぶ。

⁵⁴ ジャヒィタンは「漢回」が集まる場所の意味である。この「漢回」というのは漢語を母語として使う回族のことを指す。

⁵⁵ 第2章の2.2.2節を参照。

⁵⁶ 経済の発展とともに、多くの労働力が都市部に移り、農村部には老人しか残っていない。「空巢老人」は中国が今直面している社会問題の一つである。

⁵⁷ 「空巢老人」と同程度の社会問題である。両親が都市部へ長期間出稼ぎに行き、子供は祖父母や親族に預けられている。

マタン村でも出稼ぎに行っている若者は多いが、その多くは康楊鎮政府所在地や近隣村での住宅の建設などの仕事に従事し、普段は家から仕事場に通っている家庭が多い。しかし、康楊鎮の回族の場合は、もともと飲食店を開く習慣を持っており、グワタン村 28 戸の内 4 戸は天津で飲食店を開いている。残りの家庭は比較的貧困な家庭が多く、その家庭の若者らは他の回族の飲食店で「麵職人」や「店員」として働いている。

グワタン村の村人は筆者に「うちの村で文化人（知識人）は一人もいない」と言っていた。中学校と小学校は義務教育なので就学者は多いが、現時点で大学生は一人もおらず、高校生も 2、3 人だけである。調査地の他民族と比較すると、回族が学校教育に積極的な態度を持っていないことが分かる。この村の各家庭に共通している特徴は、高校への進学試験に一回でも落ちると、子供を飲食店へ働きに行かせ、18 歳になるまでに嫁をもらえるだけの金を稼ぐことにある⁵⁸。回族の結婚年齢について、嚴（1996：7-8）は「解放前の年齢は女が十五歳、六歳、男が十七、八歳であった。中国の西北地区の一部では、回族が集

⁵⁸ グワタン村の村人によると、嫁への婚資は少なくとも 18 万元（約 288 万円）が必要である。現時点で、高い場合には 25 万元（約 400 万円）、普通でも 22 万元（約 352 万円）から 23 万元（約 365 万円）が必要である。その金額は、一般には嫁の教育水準、家庭背景、顔の綺麗さ、年齢により決定される。一方、婿入婚も普通にあるが、婿に婚資は必要ではない。グワタン村に自由恋愛で結婚する者はほとんどなく、むしろ青年の恋愛を避けるため、子供が恋をわかる年齢になると両親が結婚相手を探し、すぐに結婚させる。回族の高い婚資については、嚴（1996：10-11）が以下のように詳細にその理由を述べている。

これには二つの意味がある。一つは男性が簡単に離婚しないための経済的歯止めである。もう一つは女性が万一離婚した場合の生活保障となる。なぜなら、女性側に贈られた婚資は女性の個人的財産となり、男性が彼女と同居していようが離別していようが、取り戻すことができないからである。『コーラン』には、「もしおまえたちが妻をとりかえたいと思ひ、女に千金を与えたとしても、そこらいささかなりとも取り戻してはならない」。なぜなら、「贈られたものを取り戻す者は、嘔吐したものを食べる犬と同じであり、我々は、このような悪しき習慣に染まってはならないからである」とある。もちろん、女性側が婚資を受けとらなくても婚約は成立する。『コーラン』には「女たちには贈り物として婚資を与えよ。しかし、彼女たちがおまえたちに好意を示し、その一部を辞退するならば、快く受け取れ」とある。

住し、イスラム教が盛んなので、イスラム法により女九歳、男十二歳で「出幼」（つまり幼年を離れ、成人になったこと）とされ、これ以降結婚することが可能となる。このため早婚が盛んであり、娘が十三歳、四歳に達すると両親が嫁がせてしまう」と述べている。この早婚の習慣は今でも康楊鎮に属する各回族の村に残り、14歳、15歳で結婚するのは普通のことである。しかし、近年康楊鎮政府が九年義務教育を普及させるため、地元の回族が「結婚証」を申請するには中学校の卒業証明証がないと申請できないという噂が流れている⁵⁹。これについて筆者が鎮政府の職員C氏（20代 男 漢族）に確認したところ、その噂について否定はしなかったが、明確な行政文書で発表しているわけではないと言われ、実際に実施しているかどうかは不明である

5.1節で述べたように、グワタン村は独立した村ではないため、「村内」に小学校はない。グワタン村の子供が学校を通うには3キロも離れている楊家まで行かなければならない。かつて、子供達は毎日実家から楊家の小学校まで歩いて通っていたが、近年三輪車を買った家庭が多くあり、親たちが信用できる運転手に毎月一定の交通費（毎月一人50元⁶⁰）を払い、子供の送り迎えを頼んでいる。

元村長の馬氏によれば、三社（グワタン村）の教育問題を解決するため、小学校の開校を去年現地視察に来た尖州教育局の職員に相談したが、村単位で30戸ないと小学校の申請が難しいとの回答があったという。元村長の馬氏の話をもう一回引用すると「グワタンに移住してから三社の生活問題は解決できたが、教育問題は解決できていない」とのことである。

5.4 王敬民家の事例

5.4.1 王敬民家の基本データ

王敬民家は、最初に楊家の東門村から移住してきた17世帯のなかの一つであり、家庭内の言語は5.2節で述べたように、漢語青海方言だけを使っている家庭である。そして、この家庭の特徴は5.3節で述べたように、中学校以上の学校教育を受けた人がいないとい

⁵⁹ 通常「結婚証」を申請するには、戸籍本と身分証だけで良い。

⁶⁰ 村人は「運転手さんからガソリンの値段が高くなったので、来月から10元プラスしてくれと言われた。だから、これからは60元を払わなければいけない」と語っている。

う点にある。

グワタン村に三世代が揃っている家庭は普通にあるが、筆者の調査したとき、多くの家庭は第一世代と第三世代しか村にいなかった。王敬民夫妻はまさにその第一世代にあたる。第二世代の次女とその夫は、遼寧省で飲食店を経営しているため、調査は WeChat (微信) によるビデオ通話でインタビューをするという方法を取った。

表 27 に、王敬民の家庭における基本状況を記しておく。表 27 の「読み書きのできる言語」は、第 3、4 章の王徳有家庭とツイラン家庭と同じ調査方法で行なった。次女とその婿は遼寧省にいたため、読み書き能力に関する対面調査はできなかった。

表 27：王敬民家の基本データ

	年齢	戸籍上の民族	最終学歴と就学状況	読み書きできる言語	話せる言語	宗教
王敬民	61 歳	回族	回族小学校 四年生	漢語	漢語青海方言 漢語普通話 チベット語アムド方言	イスラム教
夫人	56 歳	回族	未就学	無	漢語青海方言	イスラム教
次女 ⁶¹	26 歳	回族	回族中学校 一年生	漢語	漢語青海方言 漢語普通話	イスラム教
婿	28 歳	回族	回族小学校 五年生	漢語	漢語青海方言 漢語普通話	イスラム教
孫（長男）	9 歳	回族	回族小学校 三年生	漢語	漢語青海方言 漢語普通話	イスラム教
孫（次男）	2 歳	回族	未就学	無	漢語青海方言	イスラム教

出典：2018 年 9 月の現地調査と同年 10 月のビデオ通話調査を基に筆者が作成

以下、王敬民の家族全員の言語使用について、聞き取り調査で得た情報に従いまとめる。

⁶¹ 長女は他の家庭に嫁いでおり、ここには取り上げない。

(1)王敬民

王敬民の母語は漢語青海方言であり、家庭内では漢語青海方言しか使っていない。生産隊、人民公社を体験したことがあり、そのときカルマタン村のチベット族と一緒に労働していたので、チベット語アムド方言も上手く話せるようになった。子供の時は楊家東門村に居住したので、楊家の回族小学校にも通い、漢語の読み書きはできるという。読み書き能力について、王敬民は第3章の写真2の漢語の文書は読んだが、読み方が分からない漢字も多くあった。そして、書けるのは自署ぐらいであると言い、文書を書こうとはしなかった。

(2)夫人

夫人は康家出身であり、母語は漢語青海方言である。王敬民の家に嫁いでから、村から離れたことがなく、漢語青海方言しか話せない。夫人の世代、回族には女性を学校に行かせる習慣はなかった。そのため、文字の読み書きはできない。

(3)次女

母語は漢語青海方言である。漢語普通話も話すことができる。中学生の時退学し、16歳で結婚した。家庭内では漢語青海方言しか使っていない。7ヶ月前、夫と一緒に遼寧省へ行き、飲食店を経営している。当然のことながら客とやり取りは漢語普通話である。

(4)婿

婿は化隆県出身の回族である。母語は漢語青海方言である。小学校5年生までは学校に通っていたが、学校の先生がとても厳しく、彼自身も勉強が好きではなかったため、毎日先生に殴られていたこともあり、自ら学校をやめた。漢語の読み書きはできる。アラビア語も少し読めるが、宗教用語のいくつかの単語に限定され、アラビア語で会話はまったくできない。そのため、アラビア語については表27には入れていない⁶²。

⁶² 婿の話によれば、8歳ごろ学校の休みの時、友達と常に村のモスクへ遊びに行っていた。当時モスクではアホンがアラビア語授業をやっていたので、それに興味を持ち遊び半分で参加していたという。

(5)孫たち

長男の母語は漢語青海方言である。長男、次男ともに王敬民夫婦が育児し、家庭内では漢語青海方言しか使わない。長男は小学校3年生までの学校教育により、漢語普通話で自由に会話できる。次男はまだ2歳なので、学校に行っていない。

長男は写真2の漢語の文書は読めるが、書くのは自己紹介が少し書ける程度である。

5.4.2 王敬民家の三世代の言語使用

王敬民家の三世代における言語使用状況をはっきりさせるため、第3章の王徳有家庭、第4章のツイラン家族と同様の調査質問を用いて聞き取り調査を行った。

表28は第一世代である王敬民とその妻が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。表28の「A」は漢語青海方言、「B」はチベット語アムド方言、「C」は漢語普通話、「-」はその話しかける対象が存在しないことを表す（以下同様）。そして、このABCはよく使っている言語の順に並べてある（以下同様）。

表 28：王敬民家の第一世代の言語使用

話しかける対象		王敬民	夫人
家庭内	祖父母 ⁶³	A	A
	両親 ⁶⁴	A	A
	配偶者	A	A
	兄、姉	A	A
	弟、妹	A	A
	子供	A	A
	親族	A	A
家庭外	チベット族の親友	—	—
	漢族の親友	—	—
	回族の親友	A	—
	チベット族の友達	B	—
	漢族の友達	A	A
	回族の友達	A	A
	康楊鎮の商店の店員	A C	A
	知らない人	A C	A

王敬民は家庭内で漢語青海方言しか使っておらず、家庭外でも主に漢語青海方言を使っているが、漢語普通話とチベット語アムド方言も使っている。王敬民は10年前から康楊鎮政府所在地である康家からグワタン村まで、またはグワタン村から康家まで、暇な時に三輪車で便利屋をやって金を稼いでいる⁶⁵。王敬民の三輪車を利用する客は康家へ買い物に行く楊家と、カルマタン村の人々である。彼らに対し、王敬民は漢語青海方言のほかに、チベット語アムド方言も使う。康楊鎮の商店の店員に対しては、漢語青海方言で話が通じ

⁶³ 第一世代の祖父母はすでに亡くなっているが、王敬民夫婦の言語背景を明確するために、祖父母に対して使われた言語も表に入れてある。

⁶⁴ 両親も近年亡くなられたが、この家庭の言語背景を明確するため表に入れてある。

⁶⁵ 王敬民の運転ルートは以下のようである。

グワタン村（発） — カルマタン村 — 楊家（上庄村、寺門、東門など） — 康家（着）

ないとき漢語普通話を使っている。年に一、二回ぐらい娘と婿が遼寧省で経営している飲食店を（1、2ヶ月間）手伝いに行っており、接客の時には漢語青海方言を使っている。

王敬民の妻は、家庭内及び家庭外で漢語青海方言しか使っていない。漢語普通話もある程度聞き取れるが、話せない。長男⁶⁶に子供（今は17歳）ができてから、孫たちの育児と畑の仕事に忙しくなり、友達もあまりいない。

表29は、第二世代である次女とその夫（婿）が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。

表29：王敬民家の第二世代の言語使用

話しかける対象		次女	婿
家庭内	祖父母 ⁶⁷	A	-
	両親	A	A
	配偶者	A	A
	兄、姉	A	A
	弟、妹	-	-
	子供	A	A
	親族	A	A
家庭外	チベット族の親友	-	-
	漢族の親友	-	-
	回族の親友	A	A
	チベット族の友達	-	-
	漢族の友達	-	A
	回族の友達	-	A
	康楊鎮の商店の店員	A C	A C
	知らない人	A C	C A

⁶⁶ 10年前交通事故で亡くなり、嫁は再婚している。

⁶⁷ 祖父母はすでに亡くなっているが、次女の言語背景を明確するために、祖父母に対して使われた言語も表に入れてある。婿が王敬民家の次女と結婚した時、祖父母は亡くなっていたというので、この表には「-」が入れている。

次女は家庭内では家族青海方言を使い、家庭外でも漢語青海方言の使用度が高い。次女は学校に通ったことがあるため、漢語普通話が自由に使え、接客に言語の問題はない。婿も家庭内では漢語青海方言を使い、家庭外では主に漢語青海方言を使っているが、漢語普通話も使っている。

ここで注意したいことは、第一世代から第二世代までの家族の誰もが他民族出身の人と殆ど接していないことである。その原因を婿に聞いたところ、チベット族と接しない一番の原因は言語が通じないためという。他に宗教的な問題もある。チベット族と漢族は普段酒を飲んだり、タバコを吸ったりするので、それはイスラム教では「不浄」だと見られ、接してはいけないという。しかし、同民族である回族にも友人はいないという。その原因は「毎日、忙しいから」と語るが、具体的な理由は分からない。

表 30 は、第三世代である長男が、自分の親戚と家庭外の人に、どの言語を用いるのかを整理したものである。次男はまだ2歳の幼年であるため、聞き取り調査の対象にしていない。

表 30：王敬民家の第三世代の言語使用

話しかける対象		孫（長男）
家庭内	祖父母	A
	両親	A
	配偶者	—
	兄、姉	A
	弟、妹	A
	親族	A
家庭外	チベット族の親友	—
	漢族の親友	A
	回族の親友	A
	チベット族の友達	—
	漢族の友達	A
	回族の友達	A
	康楊鎮の商店の店員	A C
	知らない人	C

孫は家庭内では漢語青海方言しか使っていない。家庭外の言語使用状況についてはほかの家族と同様に主に漢語青海方言を使う。買い物で店員に話しかけるときには、店員が青海省出身であるかどうかを確認してからどの言語を使うのかを決めるという。知らない人に対しては、漢語普通話も使っている。上の世代と異なるのは、他民族との交流を持っていることである。

5.4.3 考察

第一世代の王敬民は母語の漢語青海方言のほかに、漢語普通話、チベット語アムド方言も使う。しかし、彼の妻が、日常生活で使うのは母語の漢語青海方言だけである。第二世代の次女とその夫(婿)の母語は漢語青海方言であり、学校教育を受けたことがあるため、漢語普通話も使う。第三世代の孫の母語は漢語青海方言であり、他に今学校教育を受けているため、漢語普通話も使う。

この三世代の母語と言語能力は表31のようになる。「+」は話せる言語を表し、「-」は話せない言語を表し、「⊕」は母語を表す。ここでの「話せる」というのはコミュニケーションが取れることを表す。

表 31 : 王敬民家の三世代の言語能力

	チベット語アムド方言	漢語青海方言	漢語普通話
王敬民	+	⊕	+
夫人	-	⊕	-
次女	-	⊕	+
婿	-	⊕	+
孫	-	⊕	+

王敬民家庭の言語能力には、第3章の王徳有家庭あるいは第4章のツィラン家庭に存在した大きな差はない。特に、第二世代から言語能力は全く同じである。ただし、第一世代の言語使用は他の世代より微妙に異なる点がある。

チベット語アムド方言に関しては、第一世代の王敬民だけが流暢に話せる。上述したよ

うに、第一世代の王敬民は生産隊、人民公社の時代、隣村のチベット族と一緒に労働し、そのときチベット語アムド方言が話せるようになった。また、今でも三輪車の運転をやり続け、乗客である回族や漢族、チベット族とよく接するため、漢語青海方言のほかにも、チベット語アムド方言が必要である。王敬民家族全員の母語は漢語青海方言である。そして、漢語普通話を、夫人を除く家族全員が話せる。王敬民を含む第二世代と第三世代は学校教育を受けたことがあるので、漢語普通話が話せる。特に、第二世代が遼寧省で飲食店を経営し、接客するには普段漢語普通話を使っているため、漢語普通話が流暢に話せる。各世代の言語使用を、使用頻度の高い順に書く表 32 のようになる。

表 32 : 王敬民家の各世代の言語使用の優先度

第一世代	王敬民	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語青海方言 > 漢語普通話 > チベット語アムド方言
	夫人	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語青海方言
第二世代	次女	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語青海方言 > 漢語普通話
	婿	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語青海方言 > 漢語普通話
第三世代	孫（長男）	家庭内	漢語青海方言
		家庭外	漢語青海方言 > 漢語普通話

表 32 から分かるように、王敬民家の各世代の言語使用はその優先度から見ると、第一世代は漢語青海方言 > 漢語普通話 > チベット語アムド方言の順であるが、第二世代と第三世代からは漢語青海方言 > 漢語普通話の順となり、チベット語アムド方言が完全に消えている。また、漢語普通話の使用率も第一世代より高くなる傾向がある。それは、学校教育の他に、商売が好みである回族の外出により漢語普通話を使う機会が多いからだと考える。

グワタン村はアジョン村⁶⁸とカルマタン村の二つのチベット村の間に挟まり、特にカルマタン村と雑居の状態であるが、王敬民家の言語使用からも分かるように民族間の交流が殆ど行われていない。そのため、言語使用的にはカルマタン村の漢族家庭とチベット族家庭ほど多様ではない。

5.5 まとめ

本章では、グワタン村の回族家庭における言語使用状況を事例として取り上げた。その結果は、歴史的な背景と文化的な背景の二つの面からまとめることができる。

まず、歴史的な背景から見ると、グワタン村の回族は1980年ごろ隣村の楊家東門村から移住させられてきたものであり、カルマタン村のチベット族と漢族に比べると、後来者になる。また、カルマタン村はチベット族の人口が圧倒的多く、占めている土地も広いいため、グワタン村の回族と雑居状況になっていても、民族間の交流が殆どなく、族際結婚もない。回族の民族性について、馬平(2014:174)は「回族は伝統を重視しながら新しいことを模索する民族である。現在でも甘粛・青海・四川の回族にはチベット族と結婚する人が多い。昔、拉ト楞に貿易に来る商人は家族の連行を禁止されたため、チベット女性と結婚するようになり、この現象は拉ト楞寺にも許されている」と記し、回族とチベット族との族際結婚が普通にあることを述べている。一方、楊・馬(2010:63)は「長期間当地の主体民族であるチベット族と接触する過程で、ラサの「蔵回」は自民族の信仰と生活習慣を保持し、共にチベット文化の影響で、チベット族の生活習慣も受け取っている。例えば、アラビア語もチベット語も使い、チベット服を着て回族の帽子とスカーフを被り、清真の飲食とチベット式の飲食を組み合わせている」と、ラサに居住している「蔵回」の生活習慣について述べている。しかし、本章で取り上げたグワタン村の回族は、族際結婚は言うまでもなく、普段の周辺の他民族ともあまり接触していない。それは、住む環境に関わると考えられる。というのは、グワタン村から回族が集中して居住している楊家下庄までは3キロの距離しかない。そして、康家、化隆などもその人口9割は回族であり、周辺の多民族に頼らなくてもよい環境が整っているのである。

次に、文化的な背景から見ると、回族の家庭は普段から他民族との行き来が殆どなく、保守的と見られている。言語も母語である漢語青海方言のほかには、漢語普通話しか話せ

⁶⁸ アジョン村 (ཨ་རྒྱུང། a 'byung) はグラタン村の隣村である。

ない。その原因として考えられるのは、一つ目は早婚と、長期間の出稼ぎなどの生活習慣にある。回族は未だにイスラム法に従い、早婚の習慣を継承し続けている。結婚後家計のために夫婦で長期間出稼ぎに行く。二つ目は、宗教的な原因である。回族は一旦結婚すると宗教生活も始まる。調査地で聞いた話だと、イスラムの祈りは夫婦で行なわなければならないという。要するに、宗教生活が始まると、その規律も守る必要があり、「不浄」なものを食べたり飲んだりしているチベット族や漢族と接触しないわけである。もちろん、商売の時は他民族と接するが、普段の生活では居住地が一緒であっても、民族間の交流が少なく、言語的にも多言語的な現象は他の民族のようには見られない。

第 6 章 結論

本章では本研究においてこれまで論じてきたことをまとめる。

6.1 節では、事例として取り上げた三つの家庭を比較し、その共通点と相違点を述べる。

6.2 節では、三つの家庭の家庭内の言語を決定する要因をまとめ、次に、甘肅省肅南裕固族自治県の多民族・多言語家庭の言語使用について、嫁ぎ先の言語と周囲の言語が家庭内の言語を決定する重要な要因であることを論じた王（1998）を取り上げ、本研究の事例と比較考察する。6.3 節では、今後の課題について述べる。

6.1 三つの家庭の比較

本論文では、チベット語話者が主であるカルマタン村を対象にそこに暮らす漢族家庭、チベット族家庭、回族家庭を事例として取り上げ、分析を行った。その結果、主として嫁の加入が家庭の言語選択に影響を与えていること、民族間の接触が多言語使用に直接関わることが明らかになった。

この三つの家庭の共通点としては次の二つがある。①多民族多言語という社会背景を持っていること、②三世代が揃っていることである。まとめると表 33 になる。

表 33：三つの家庭の共通点

①多民族多言語という社会背景	王徳有家：王徳有家族が 1918 年に青海省楽都からチベット村であるカルマタン村へ移住して来、今に至る。
	ツィラン家：元々カルマタン村の出身である。
	王敬民家：1980 年に楊家下庄の東門村からカルマタン村の所有地であるグワタンに移住して来、調査地では独立した村という認識であるが、カルマタン村と雑居状況にある。
②三世代が揃っている	調査対象であるいずれの家庭も三世代が揃っている家庭である。

一方、相違点として次の二つがある。①民族所属が異なること、②各家庭の各世代の言語能力と言語使用が異なることである。まとめると表 34 のようになる。

表 34 : 三つの家庭の相違点

各家庭の相違点	王徳有家：もともと漢族の家庭であったため、第一世代と第二世代（嫁は含まない）は漢語青海方言とチベット語アムド方言を自由に切り替えることができる。
	ツイラン家：もともとチベット族の家庭であったため、第一世代と第二世代（婿は含まない）は漢族青海方言と漢語普通話の言語能力には限りがある。
	王敬民家：回族の家庭であり、第一世代の王敬民は楊家東門村で生まれ育ったため、彼だけが漢語青海方言のほかチベット語アムド方言も話せる。他の家族は漢語青海方言と漢語普通しか話せない。

6.2 家庭内の言語を決定する要因

本研究で取り上げた三つの家庭の言語使用に影響を及ぼしている重要な要因は、結婚と宗教的な問題である。表 35 は各家庭の家庭内における言語使用に影響する各要因をまとめたものである。

表 35 : 各家庭内の言語使用に影響する要因

	嫁か婿か	家庭内の言語	宗教
王徳有家	嫁（漢族）	嫁に合わせる （王徳有夫妻と長男は漢語青海方言とチベット語アムド方言とを自由に切り替えることができる。しかし、嫁が漢語青海方言しか話せないため、家庭内の言語を自然に嫁に合わせた）	チベット仏教
ツイラン家	婿（漢族）	互いに合わせようとしていない （ツイランと長女は母語のチベット語アムド方言のほか、漢語青海方言もある程度話せる。しかし、ツイランの妻はチベット語アムド方言しか話せない。一方、婿も片言のチベット語アムド方言しか話せない。しかし、妻も漢語を聞き取れるし婿もチベット語を聞き取れるため、互いに無理して合わせようとしていない）	チベット仏教
王敬民家	婿（回族）	変わらない （王敬民家の母語は漢語青海方言であり、婿の母語も漢語青海方言である。そのため、家庭内の言語が一致しており、変化は見られない）	イスラム教

表 35 においてとりわけ注目されるのは、家庭内の言語を嫁に合わせた王徳有家と、宗教上の問題が重要な王敬民家である。

王敬民家はイスラム教の家庭である。族際結婚のケースが多く見られ、言語的にも多言語使用の現象が普通に見られる非イスラム教の家庭と違って、イスラム教の家庭は族際結婚を殆ど行っていない。澤井（2010 : 55）が「「回回親転来転去一家人」（Huihuiqin zhuanlai zhuanqu yijiaren）という諺が引きあいに出されることが非常に多かった」と述べているよ

うに、回族の婚姻は親族間のそれが普通であり、結婚相手の選択は非イスラムに比べ厳しい。そのため、家庭内言語も単一のまま保っている現象が普通に見られるのだと思われる。

一方、王徳有家の場合には第一世代の王徳有夫妻と、その長男がもともと漢語青海方言とチベット語アムド方言とを自由に切り替えできていたため、利便さから彼らが家庭内の言語を漢語青海方言しか話せない嫁に合わせたわけである。仮に、王徳有夫妻がチベット語アムド方言しか話せないとしたら、嫁が2年間をかけてチベット語アムド方言を学んで、言語を義理の親に合わせていたことであろう。というのは、現地調査の時、化隆県からグワタン村に嫁いできた「蔵回」の嫁が筆者に「嫁いだ当時は漢語青海方言が一言も話せなかった。2年を経たころ漢語青海方言が話せるようになった」と語ってくれた。言語習得の期間について、楊家上庄村へ嫁いだチベット族の女性からも調査地の漢語方言を喋れるようになるまで2年間かかったという割に統一した回答が得られている。

この嫁の加入による家庭内の言語使用が図2のように表示できる。図2では、個々の言語をAとBで表す。

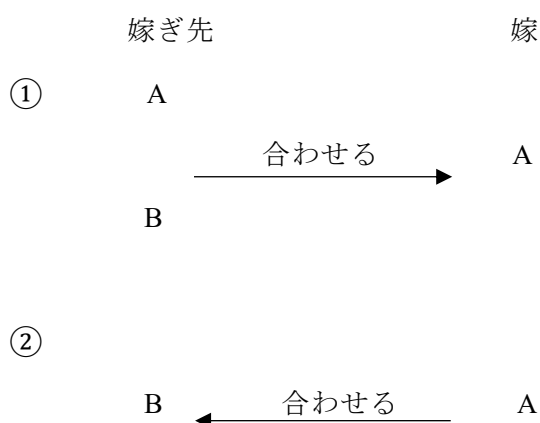


図2：嫁による言語の変化

要するに、嫁は嫁ぎ先の言語状況によって、嫁ぎ先の家族とお互いの言語を合わせている。その合わせ方としては、図2のように嫁と義理の両親の言語が一致するかしないかによって、二つに分けられる。一つ目は、嫁ぎ先の義理の両親が自らの言語のほか、嫁の言語も話せる場合であり、このとき家庭内の言語は嫁の言語に合わせている。もう一つは、嫁いだ先の義理の両親と嫁がお互いに別の言語しか話せない場合であり、このときには嫁が2年間をかけて嫁ぎ先の言語を学び家庭内の言語は義理の両親の言語に合わせて

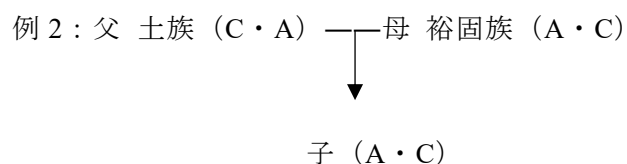
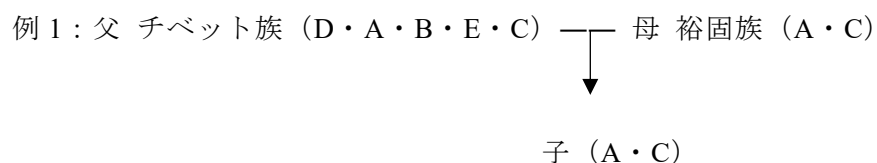
いく。そのため、嫁は家庭内の言語に必ずしも影響を与えるとは言えないことになる。

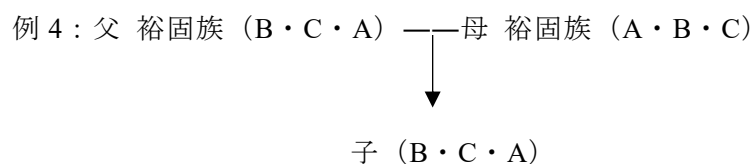
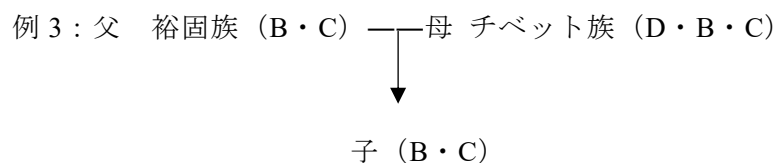
王徳有家とツイラン家は、一見すると、嫁か婿かによって、家庭内の言語に異なる影響を与えているように見えるが、それよりも、嫁ぎ先の言語と外来者（嫁か婿）が共通の言語を持っているかいないかが重要な要素であることが分かる。ただし、この二つの事例から、この地域のすべての家庭が外来者の嫁と婿によって、家庭内の言語に同様の変化があるということもできない。

家庭用語を決定する要因について、王（1998）は主として裕固族が暮らしている甘肅省肅南裕固族自治県の事例を取り上げている。裕固族は、一部は漢語の単一言語話者であるが、その多くは自民族の言語であるチュルク語系の西部裕固語とモンゴル語系の東部裕固語との二言語話者である。

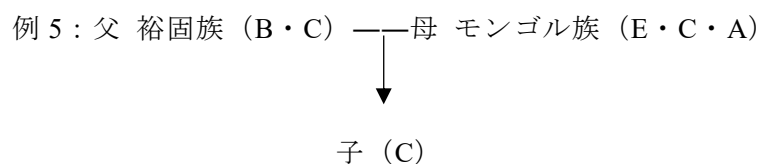
王（1998）は甘肅省肅南裕固族自治県の多民族・多言語家庭の言語使用について、①親が多言語を使用、周囲が民族語を使用、②親の片方が民族語の単一言語を使用、周囲が民族語を使用、③親の片方が漢語の単一言語を使用、周囲が漢語を使用、④親とも異なる民族語の単一言語を使用、周囲が民族語を使用、といった四つに分けて分析をしている。それぞれ下記のとおりであるが、「A」は東部裕固語、「B」は西部裕固語、「C」は漢語、「D」はチベット語、「E」はモンゴル語を表す。斜体は結婚してから学んだ言語を表す。言語の使用能力の高い順に ABCDE は並べてある。

① 親が多言語を使用、周囲が民族語を使用



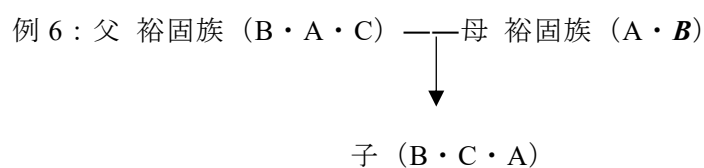


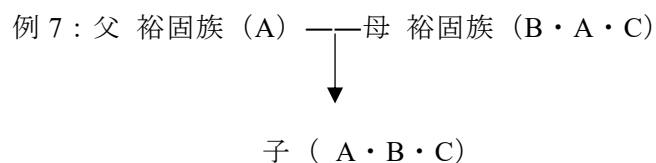
四例とも親が多言語を使用し、親の片一方が調査地の民族語の話者であり、周囲もその民族語を主にして使用しているため、家庭内の言語も調査地の民族語になっている。そして、次世代も親の多言語を継承し、全ての事例に割に統一した結果が見られる。王は例5のように親が多言語の使用者であり、次世代の言語が漢語である事例も挙げているが、周囲の言語使用は不明であるため、上の例と同等に扱うことはできない。



例5は王(1998)が挙げた唯一社会的地位が高い家庭であり、父は肅南県黄金生産管理指揮部の副指導者であり、母は肅南県工商業連合会の副主任である。親二人とも多言語の使用者であるが、次世代は漢語の単一言語話者になっている。親の社会地位からは住む所が漢語の使用度が高い町レベルであることが推測される。

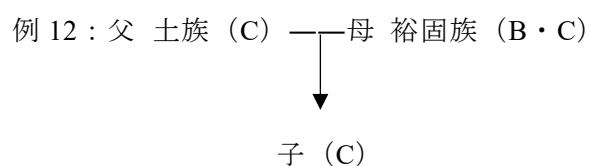
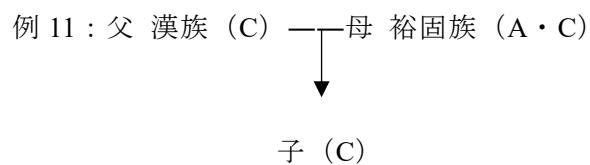
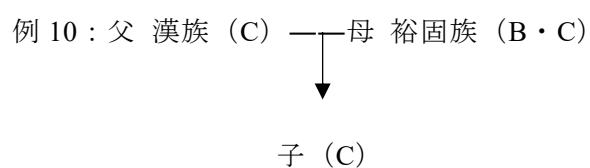
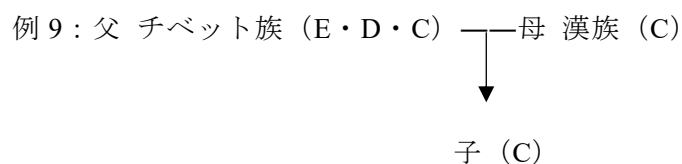
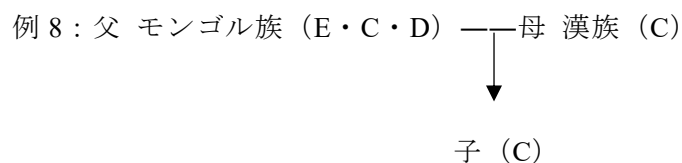
② 親の片方が民族語の単一言語を使用、周囲が民族語を使用

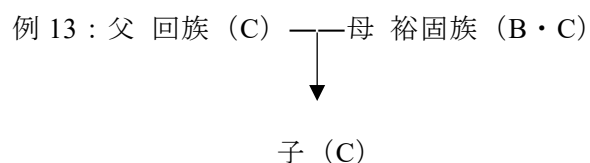




例6の母は、結婚前はA言語の単一言語話者であり、B言語は嫁いってから学んだものである。それは結婚相手の第一言語がB言語であるとともに、周囲で使われている言語がB言語であることが原因となっている。そして、例7は父がA言語しか話せないため、多言語を使用する母が父の言語に合わせていることが分かる。

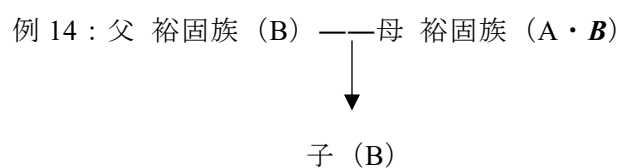
③ 親の片方が漢語の単一言語を使用、周囲が漢語または民族語を使用





③の各事例から親の片方が単一言語しか話せない場合、またその言語が漢語である場合、周囲が民族語を使っている、家庭内の言語は漢語になる可能性が高く、次世代も漢語の単一言語話者になる可能性が高いことが分かる。これは漢語の社会的な地位が関わっていると思われる。近年民族地域においても経済発展とともに、村レベルでも漢語の使用が高くなっている現象が反映していると言えよう。

④ 親とも異なる単一言語を使用、周囲が民族語を使用



例 14 は父が B 言語の単一言語話者であり、周囲も B 言語を使っているため、母は嫁いてきてから B 言語を学び、次世代も B 言語の単一言語話者になっている。

王 (1998) の事例から、甘肅省肅南裕固族自治県における家庭内の言語使用と次世代の言語使用で何が優先されているのかをまとめると、表 36 のようになる。

表 36：裕固族自治州における家庭内の言語と次世代の言語を決める傾向

親が多言語話者	<p>①周囲が民族語を使用 家庭内で二つ以上の言語を使用し、次世代も多言語を継承している。</p> <p>②周囲が漢語を使用 家庭内で漢語だけを使用し、次世代は漢語の単一言語話者である。</p>
親の片方が漢語の単一言語話者	周囲の言語が民族語であるか漢語であるかに関わらず、家庭内の言語は漢語しか話せない親の片方に合わせている。次世代は漢語の単一言語話者である。
両親がともに異なる民族語の単一言語話者	結婚後、嫁ぎ先の言語を学び、徐々に家庭内の言語が統一している。次世代も民族語の単一言語話者である。

表 36 のように、親の言語と周囲の言語が直接次世代の言語に影響を与えるが、周囲の言語によって、入ってきた外来者（嫁か婿）が嫁ぎ先の言語を学ぶ場合もあり、次世代も片方の親の言語を継承する。しかし、親の片方が漢語の単一言語話者である場合、次世代は漢語の単一言語話者になっている。これは言語の威信性に関わると言えよう。

家庭内の言語を選択する時、何を優先にしているのかをまとめると、図 3 になる。

嫁ぎ先の家庭内の言語		周囲の言語		優先言語
漢語	——	漢語	=	漢語
漢語	——	民族語	=	漢語
民族語	——	民族語	=	民族語のみ
民族語	——	民族語+漢語	=	民族語+漢語

図 3：家庭内の言語状況と周囲の言語状況による言語の優先権の変化

図 3 のように甘粛省肅南裕固族自治州に暮らしている裕固族を中心とした各家庭は、嫁ぎ先の言語を優先にしている。他方、例 8 と 9 のように嫁ぎ先と共通の言語を持っている場

合、またその共通の言語が漢語である場合、漢語が優先される。

本研究で取り上げた三つの家庭を見ると、ツィラン家と王敬民家はごく普通の事例である。それは、ツィラン家は家庭内の言語を婿に合わせることはなく、婿が片言のチベット語で第三世代の息子と交流する現象が出ている。王敬民家は族内結婚であり、言語的にも共通の言語を持っているため、互いに合わせる必要はない。王徳有家は外来者である嫁の言語に合わせている。それは、表 36 にまとめたように共通の言語が漢語である場合、漢語を優先するという点では似ていると言える。しかし、王徳有家の嫁はなぜ嫁ぎ先の言語を優先して選択せず、チベット語アムド方言を話さなかったのであろうか。

王徳有家の時代背景を振り返ると、王徳有は小さい時に両親からチベット語の学習を進められ、チベット族の小学校に通ったことがある。第二世代の長男もチベット民族中学校の学歴を有し、その当時、家庭内の言語が一時的にチベット語アムド方言になったことがある。それが漢語青海方言しか話せない嫁の加入によって、家庭内の言語が再び漢語青海方言に戻っていくことになる。

このような家庭内の言語変化は、王徳有家が特別なものではない。漢族の 50 代の嫁⁶⁹がカルマタン村に嫁いで来てからチベット語アムド方言を学び、チベット語の経典まで暗記したと語ってくれたことがある。この話から、少なくとも 30 年前のカルマタン村ではチベット語アムド方言の社会地位が高かったと言え、このことは、王徳有の両親が王徳有にチベット語を学ばせたことから明らかである。

カルマタン村は 2000 年前後西部大開発の影響で、村全体に電気が通り、テレビやラジオなどの家電が増え、村全体の生活が伝統の半農半牧から全農に転換し始め、それによって自給自足の伝統的な生活から、何でも現金を使う現代的な生活に変わっていった。

更に、九年義務教育の教育政策が全農への転換を加速させた。普段家畜に従事する子供⁷⁰が学校に通うようになると、農業と牧畜を両立するには人手が足りなくなり、村人は牧畜を徐々にやめていった。また、子供の学費や家庭の電気代などは現金で払わないといけないので、村人は農閑期を使って、近くの町へ出稼ぎに行くようになった。このよ

⁶⁹ 王徳有家の親族の家の嫁である。

⁷⁰ 筆者が 10 歳の時、家には羊 30 頭前後、牛 3 頭、馬 1 頭がいた。その時、家畜の世話をすることは子供の仕事であり、朝太陽を出るとパンとお茶を持って家畜を山に連れて行った。そして、太陽を沈むとき、家畜と家に帰った。羊 100 頭を持っている家庭も普通にあった。

うに、出稼ぎのための外出と学校教育のための外出が増し、村の若い世代の漢語青海方言あるいは漢語普通話の言語能力は上昇していった。

王徳有家の嫁が嫁いできた時には、村で漢語が使える村人が増えていたことが推測される。だから、王徳有家の第三世代が漢語青海方言と漢語普通話しかできないということも当然の現象である。一方、第三世代の言語能力について、「孫を村の民族小学校に入れようとしたが、チベット語アムド方言が全然聞き取れないという理由で、学校から入学を断られた」と王徳有夫人が話してくれたことがある。この家庭の第三世代は意図的にチベット語アムド方言を学ばなかったのではなく、家庭内で漢語青海方言を使っていたことに加え、周囲でも漢語青海方言が使える村人が増えていたため、第三世代の言語は自然に漢語青海方言になっていったと考えられる。外来者の嫁の言語に合わせていたように見えた王徳有家の家庭内の言語は村を取り巻く時代背景が重要な要素であり、それに合わせて変化してきたということになる。

6.3 今後の課題

チベット地域の多民族村の言語使用状況を各家庭に焦点を当てた研究はこれまでなかった。本研究が初めてチベット村に居住している漢族家庭とチベット族家庭、回族家庭に焦点をあてて分析を行ったものと言ってよい。

本論文では、漢族のまま残っている漢族の家庭、長期間に渡って家を空けている漢族の婿を持っているチベット族の家庭、チベット族と雑居しながら漢語しか話せない回族の家庭を取り上げた。しかし、それらとは逆に、チベット族と族際婚姻関係を持っている漢族家庭、日常的に在宅している「漢族の婿」を持っているチベット族の家庭、チベット語を母語としている「蔵回」と婚姻関係を持っている回族の家庭であればまた異なるデータが得られたのではと思われる。

今回の研究調査では、王敬民家の第一世代と第三世代に対し対面調査を行ったが、第二世代は出稼ぎ中なので、ビデオ通話で調査するしか方法がなかった。また、ツィラン家は、漢族の婿に聞き取りをする機会がなかったり、話を聞くとき話を飛ばされたりして詳細な調査ができなかった点もある。そのため、チベット族の家庭と回族の家庭の調査にはいろいろな面で不便な点があり、データも漢族家庭ほど十分ではないため、この三つの家庭を十分に比較及び検討したとは言えないところもある。また、本研究で用いた個々人の言語使用に関するデータは、調査対象の自己申告によるものである。そのため、実際にどうのよ

うに各言語を使い分けているのかは調査時間に限りがあり、詳しく記録できなかったことも残念に思っている。

多民族村の家庭の言語使用状況を探るには、調査対象の言語使用場面や話しかける対象によって、どのように言語を切り替えているのかを掘り出し、多民族村の言語使用の全体像を明らかにしていく必要がある。また、外来者（嫁か婿）の言語と嫁ぎ先の言語が一致するかないかによって変化を起さる現象が普通的な現象として位置付けるかどうかは今後の重要な課題の一つになりうる。

参考文献

〈日本語文献〉

- 海老原志穂 (2006) 「チベット語アムド方言の敬語」『東京外国語大学記述言語学論集』
2,3-20.
- 海老原志穂 (2019) 『アムド・チベット語文法』ひつじ書房.
- 川澄哲也 (2012) 「張成材氏著『西寧方言詞典』所収例文の音声表記と訳注」『福岡大学
研究部論集』3,59-94.
- 尙蔵杰 (2016) 『中国青海省チベット族村社会の変遷過程』連合出版.
- 嚴汝嫻 (1996) (曾士才訳) 『中国少数民族の婚姻と家族・中巻』第一書房.
- 澤井充生 (2010) 「回族の親族カテゴリーをめぐる覚書—寧夏回族自治区銀川市の事例か
ら—」『人文学報社会人類学分野』423,43-69.
- 周楊措 (2019a) 「チベット・アムド地域における漢族家庭の言語使用状況—青海省黄南
藏族自治州尖扎県康楊鎮カルマタン村の王徳有家庭を事例に—」『国際協力研究誌』
25 (1・2 合併号) ,25-37.
- 周楊措 (2019b) 「チベット・アムド地域におけるチベット族家庭の言語使用状況—青海
省黄南藏族自治州尖扎県康楊鎮カルマタン村のツイラン家庭を事例に—」『北研学
刊』15,118-129.
- シンジルト (2003) 『民族と語りの文法』風響社.
- 田畑久夫・金丸良子・新兎康・松岡正子・素文清・C.ダニエルス (2001) 『中国少数民族
事典』東京堂出版.
- チョルテンジャプ (2014) 「チベットアムド地域におけるルロ祭とその社会的な議論につ
いて」『日本西藏学会々報』60,103-121.
- 中野淳 (2009) 『青海概説』慧文社.
- 西義郎 (1987) 「チベット語の方言」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』冬
樹社,170-203.

馬平（2014）（辺境市川聖訳）「近代環チベット地域における回族の内陸貿易」『総合政策論叢』27,167-175.

毛里和子（1998）『周縁からの中国—民族問題と国家』東京大学出版会.

山本雅代（2014）『バイリンガリズム入門』大修館書店.

〈中国語文献〉

馬燕（2012）「青海地区藏漢民族關係調查研究—貴南県沙拉村為例」『北方民族大学学報（哲学社会科学版）』6,48-53.

南嘉才讓（1997）「藏語書面語和各方言的關係」『西北民族研究』2,63-66.

駱桂花（2005）「青海藏区回族社会生活變遷調查—以黄南州隆務鎮為例—」『青海民族研究』4,9-15.

格桑居冕・格桑央京（2002）『藏語方言概論』民族出版社.

康楊鎮政府（2016）『2016年康楊鎮城鄉居民基本医療保險參保任務分解表』康楊鎮政府.

黄南藏族自治州志編纂委員會（1999）『黄南州志（上）』甘肅人民出版社.

賈晞儒（2006）「語言接觸中的漢語青海方言詞」『青海民族学院学報（社会科学版）』3(2),108-113.

尖扎県地方志編輯委員會編（2003）『尖扎県志』甘肅人民出版社.

瞿靄堂（2014）「中国少数民族語言文字使用情況的調查和研究」『民族翻譯』4,5-19.

先巴（2014）『青海藏族簡史』青海人民出版社.

徐向陽・閔文義（2009）「甘肅漢藏雜居村庄民族關係現狀—以舟曲県嘎麦諾村為例—」『北方民族大学学報（哲社会科学版）』3,50-54.

王遠新（1998）「通婚对肅南裕固族自治县各民族語言使用特点的影響」『滿語研究』1(26),57-66.

王越平（2008）「排斥与融合—四川白馬藏族入贅婚研究—」『西北民族研究』2,186-189.

陳秉淵（2015）『馬步芳家族統治青海四十年』青海人民出版社.

陳良煜・李咏梅（2012）『青海方言与河湟文化』青海人民出版社.

宗喀・漾正冈布（2015）「化隆“斡回”（藏回）的文化認同變遷」『中国民族学』1.

曹紅梅（2014）「青海省—藏族村寨的双語生活」『中国社会語言学』1,72-78.

冶清芳（1986）「青海化隆卡力崗地區藏回淵源考」『青海師範大学学報（社会科学版）』(4),70-75.

姚春林 (2014) 「城鎮化背景下青海省黃南藏族自治州馬克唐鎮語言使用及語言態度研究」
『語言學研究』 14,181-189.

姚春林 (2015) 「活力與瀕危：安多藏語文使用及態度研究—青海省黃南藏族自治州古什當
村為個案—」『華南理工大學學報（社會科學版）』 17(5),84-89.

楊曉純・馬艷 (2010) 「拉薩藏回及其文化思考」『青海民族研究』 21(4),61-64.

安世興 (1993) 「甘青藏區雙語的使用和發展」『中國少數民族語言文字使用和發展問
題』,101-120.

〈チベット語文獻〉

Blo bzang snyan grags (1992) *Mdo smad gnas chen rma 'gram rdo rje brag gi lo rgyusabazhugs
so*, Xining minzu yinshuachang yinshua.

'Brug g.yang mtsho (2018) *Bod rigs grong sde'i nang gi rgya rigs khyim tshang gi mi rigs ming
thob dang skad cha gdam ga byed stangs skor la dpyad pa*, Mtsho sngon spyi tshogs tshan
rig,pp.155-165.

Dbang grags (2011) *Mdo smad lho phyogs rma 'gram btsan rdzong gcan tsha yul gru'i sngon
byung srid pa'i snying gtam*, Kan su'u mi rigs dpe skrun khang.

Dkon mchog bstan pa rab rgyas, Brag dgon pa (1982) *Mdo smad chos 'byung deb ther rgya
mysho*, Kan su'u mi rigs dpe skrun khang.

Don grub tshe ring (2011) *Bod kyi yul skad rnam bshad*, Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang.

Hor gtsang 'jigs med (2009) *Mdo smad lo rgyus chen mo*, Bod kyi dpe mdzod khang.

Pad ma lhun grub (2009) *A mdo'i yul skad kyi sgra gdangs la dpyad pa*, Mtsho sngon mi rigs
dpe skrun khang.

Pad ma rdo rje (1989) *Dag yig gsar bsgrigs*, Mtsho sngon zhing chen zhin ha dpe khang.

Snying lcags (2011) *Rma lho'i sa ming lo rgyus rig gnas brda 'grel*, Kan su'u mi rigs dpe skrun
khang.

Stag rig rta mgrin rgyal (2016) *Khri ka'i a myes yul lha'i bod lugs dad mos zhib 'jug*, krung go'i
bod rig pa dpe skrun khang.

Zhang Yisun (2010) *Bod rgya tshig mdzod chen mo*, Mi rigs dpe skrun khang.

添付資料（中国語版）

问 卷 调 查

这次调查的目的是为了掌握尖扎县康杨镇尕玛塘村全村的语言使用情况。调查结果不会用在研究以外的其他方面。对于涉及个人隐私的项目不会公开发布。

问题 1：家里有几口人

问题 2：家庭成员的民族和年龄，性别

户口上的民族：①_____ ②_____ ③_____ ④_____ ⑤_____ ⑥_____

年龄：①_____ ②_____ ③_____ ④_____ ⑤_____ ⑥_____

性别：①_____ ②_____ ③_____ ④_____ ⑤_____ ⑥_____

问题 3：平常在家里使用的语言

A 普通话

B 青海话

C 藏语

D 藏语强 青海话强

E 青海话强 藏语弱

问题 4：家中有上学的孩子吗？

A 有 B 没有



有几个人？_____人。 上几年级？ 年纪：_____

问题 5：上的是哪所学校？

A 民族学校

B 普通学校

C 回族学校

问题 6: 平常在家中看的是一下哪个电视台?

A 藏语台

B 汉语台

ཡིག་ངོས་འདྲི་བཤེར།

ཐེངས་འདིའི་དོན་གསུང་བཤེར་གྱི་དམིགས་ཡུལ་ནི་གཅན་ཚ་རྫོང་གདོང་ལྷ་གོང་དལ་སྐར་མ་ཐང་མེ་བའི་སྐད་ཚེའི་བཀོལ་སྤྱོད་གནས་ཚུལ་
ལ་རྒྱལ་ལོན་བྱ་ཆེད་ཡིན་ཞེས་ཤིང་། རྒྱལ་ལོན་ལས་བྱུང་བའི་གནས་ཚུལ་དེ་ཞིབ་འཇུག་གི་སྤོགས་ལས་རྣམ་པ་གཞན་དུ་བཀོལ་མི་སྲིད་པ་དང་མི་
སྐར་གྱི་གསང་བའི་སྐོར་ཀྱང་སྤྱི་ལ་སྤོགས་པར་མི་བྱའོ།།

དྲི་བ་༡ བྱིས་ལ་བཟའ་མི་དུ་ཡོད།

དྲི་བ་༢ བྱིས་གྱི་བཟའ་མོ་སོ་བྱིས་ཚོའི་ངོས་ནས་མི་རིགས་གང་ལ་གཏོགས་པ་དང་། མོ་ཚོད། མོའམ་མོ་གང་ཡིན་ཚུལ་བཅས་
ཡང་རིམ་བཞིན་རེདུ་མིག་དུ་འབྲི་རོགས།

གལ་ཏེ་བཟའ་མི་བརྒྱ་ཡན་ཡོད་ན་ཤོག་བྱའི་རྒྱབ་ངོས་སུ་འབྲི་རོགས།

ཡང་རིམ།	མི་རིགས།	མོ་ཚོད།	མོའམ་མོ།
༡			
༢			
༣			
༤			
༥			
༦			

དྲི་བ་༣ བྱིས་ནས་རྒྱལ་དུ་བཀོལ་བའི་སྐད་རིགས།

༡ རྒྱའི་སྐད།

༢ མཚོ་སྐོན་སྐད།

༣ ཡོད་སྐད།

༤ ཡོད་སྐད་བཤད་པ་བཟང་ལ་མཚོ་སྐོན་སྐད་བཤད་པ་ཞན།

༥ མཚོ་སྐོན་སྐད་བཤད་པ་བཟང་ལ་ཡོད་སྐད་བཤད་པ་ཞན།

དྲི་བ་༤ བྱིས་དུ་སྐོབ་གྱུར་འགོ་བཞེན་པའི་བྱིས་པ་ཡོད་དམ།

ཀ ཡོད།

ཁ མེད།

↓ གལ་ཏེ་ཡོད་ན་གཤམ་གྱི་རེའུ་མིག་སྐོང་རོགས།

མང་རིམ།	ལོ་ཚོད།	སློབ་གྲུབ་རིམ་པ།	སློབ་གྲུབ་རིགས། ཀ མི་རིགས་སློབ་གྲྭ། ཁ རྒྱ་སྐད་གཙོ་བོའི་སློབ་གྲྭ། ག ལུང་རིགས་ སློབ་གྲྭ།
༡			
༢			
༣			
༤			

དྲི་བ་ ༥ རྒྱན་དུ་བྱིས་ནས་ཉེ་སའི་སློབ་བརྒྱན་ལེའུ་ཚན་གང་ལ་གཏོགས།

ཀ བོད་སྐད་ལེའུ་ཚན།

ཁ རྒྱ་སྐད་ལེའུ་ཚན།

添付資料（日本語訳）

アンケート調査

この調査の目的は、尖扎県康楊鎮カルマタン村の言語使用を把握するためのものです。調査結果は研究以外のところには使用しません。個人のプライバシーも公開することはありません。

問題 1：何人家族ですか？

問題 2：家族個々の民族と年齢、性別を書いてください。

戸籍上の民族：①_____ ②_____ ③_____ ④_____ ⑤_____ ⑥_____

年齢：①_____ ②_____ ③_____ ④_____ ⑤_____ ⑥_____

性別：①_____ ②_____ ③_____ ④_____ ⑤_____ ⑥_____

問題 3：普段、家庭内でどの言語を使っていますか？

- A 漢語普通話
- B 漢語青海方言
- C チベット語アムド方言
- D チベット語アムド方言強・漢語青海方言弱
- E 漢語青海方言強・チベット語アムド方言弱

問題 4：学校に通っている子供はいますか？

- A ある
- B ない



何人いますか？_____人。 何年生ですか？_____

問題 5：どの学校に通っていますか？

- A 民族学校
- B 普通学校

C 回族学校

問題 6： 普段、家でどのテレビ番組を見ていますか？

A チベット語の番組

B 漢語の番組

謝 辞

本論文に執筆にあたって、多くの方々からご指導ご協力をいただき、学位論文を完成させることができました。

まず、指導教員である佐藤暢治先生には、社会言語学をゼロから教えていただき、論文構成から最後の完成に至るまで、温かく見守っていただき、心から深く感謝を申し上げます。副指導先生の関恒樹先生には、私の博士課程前期から博士課程後期までずっと丁寧にご指導、ご助言を頂きました。深見兼孝先生には、いつも私の下手な日本語を修正していただきました。心から感謝を申し上げます。

広島大学大学院文学研究科の根本裕史先生には、いつも温かく励ましていただきました。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の星泉先生には、本論文を細部まで丁寧にご指導していただき、貴重なコメントを頂きました。心から感謝を申し上げます。

調査のデータを提供していただいた尖扎県康楊鎮政府の職員の皆様、カルマタン村とグワタン村の村人にも感謝を申し上げます。特に、私の調査対象である王徳有の家族、王敬民の家族、ツイランの家族には現地調査に行くたびに大変お世話になりました。私が何度ご自宅にお邪魔しても、いつも笑顔でお迎えいただきました。感謝を申し上げます。

本論文の完成には、先生方とカルマタン村の村人以外にもヒロセ国際奨学金財団からの経済的な支援がなければこのように順調に進んでいなかったと思います。この3年間、大変お世話になりました。どうも有難うございました。

最後に、私のことを毎日祈って見守ってくれていた両親、私のことを常に信じ、温かく励ましてくれた夫に、心から感謝を申し上げます。

令和元年 7 月 29 日